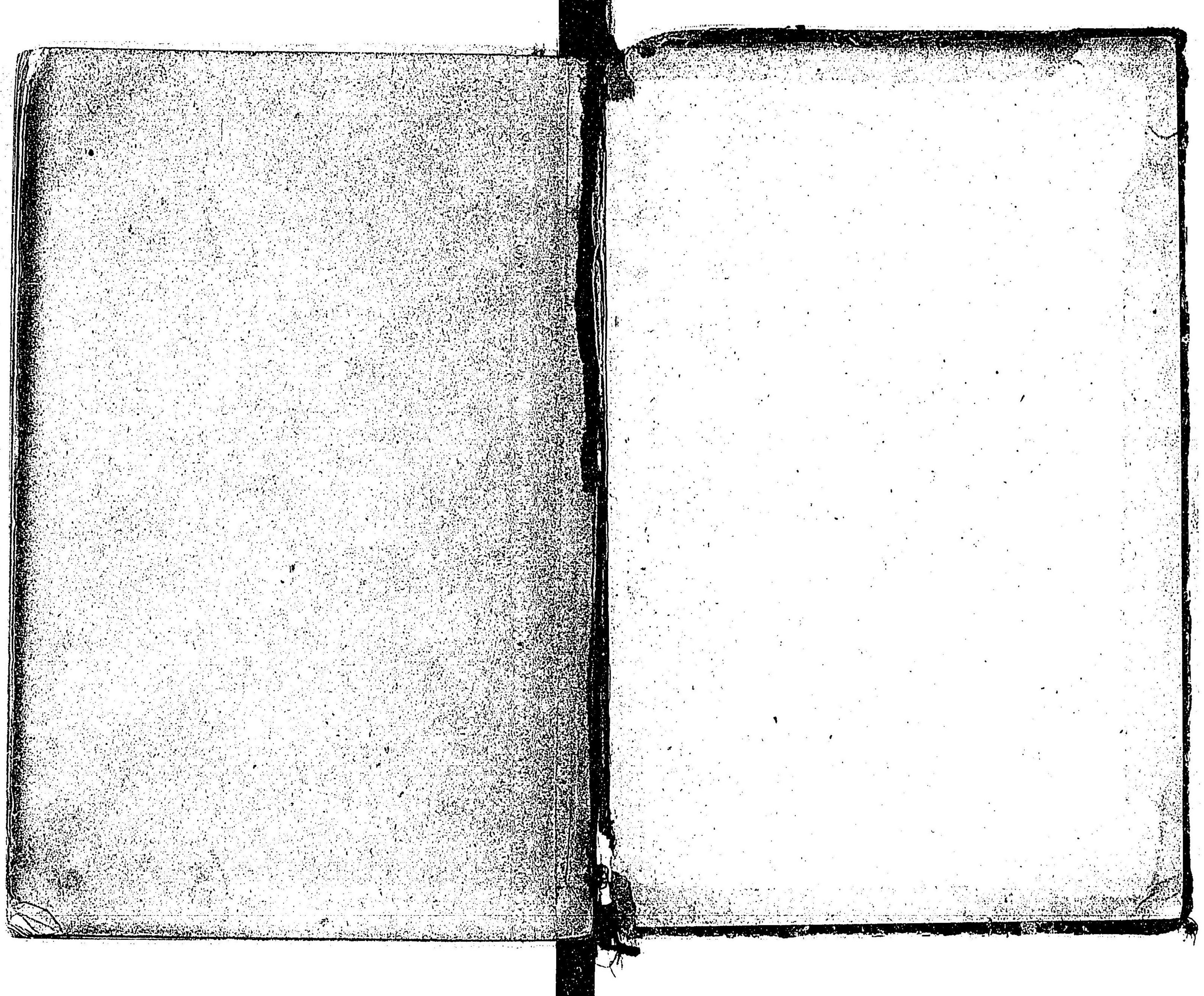


97

1

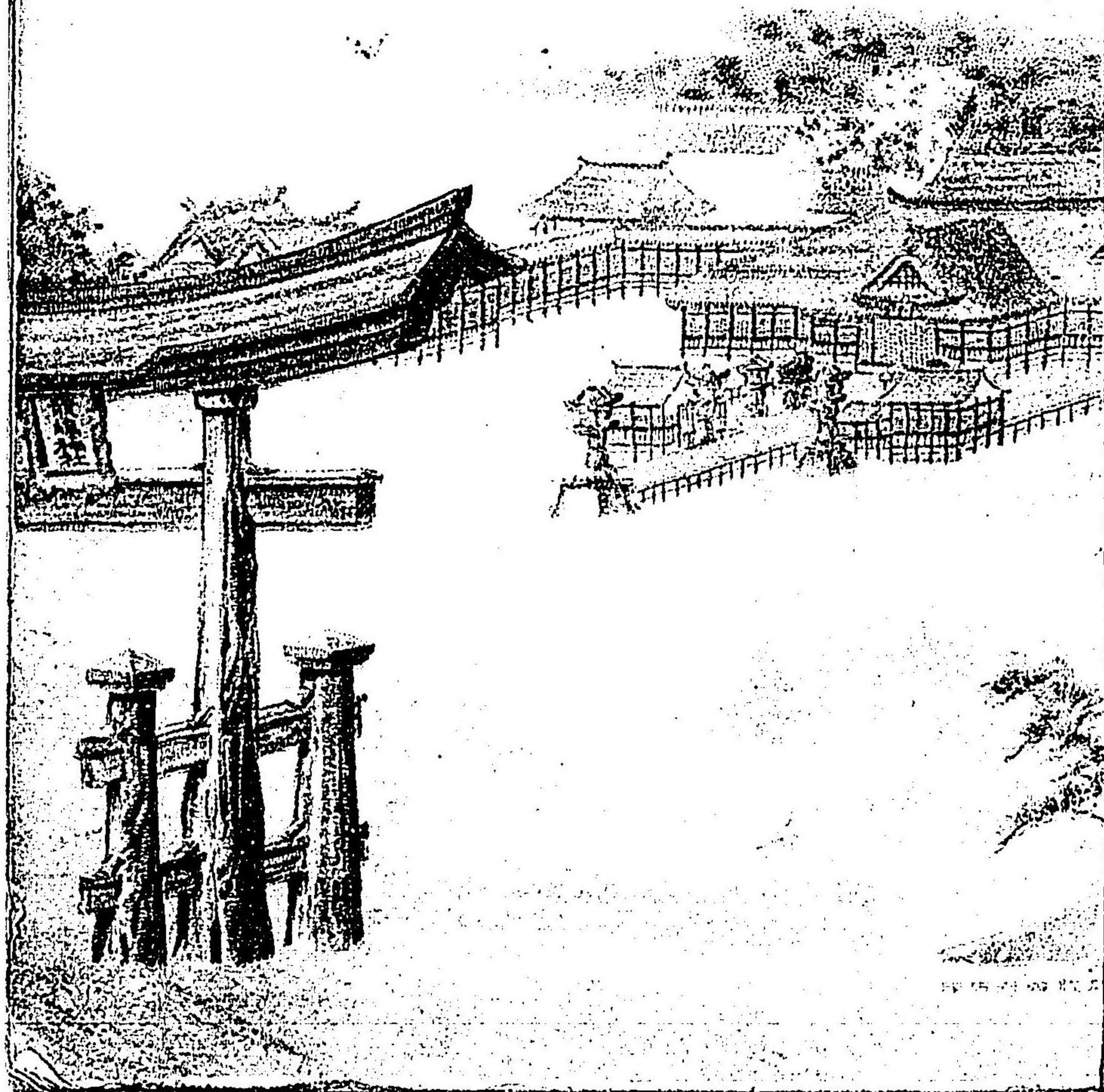
巖
島
案
内
記



99
1

GAIDE TO ITSUKUSHIMA.

記 丹 案 島 嚴



例言

97-1

本書は第五回内國勸業博覽會の開設に際し。嚴島準備會の囑に依り島内に於ける名勝舊跡の現状を紹介せんがために編纂せるものとす。編纂の事項中最も重きを置きたるは嚴島神社に關する事跡にして。これに次ぎ島内各地に於ける山海自然の美が各特殊の風光を發揮して造化の英靈を發き。優に宇内無比の絶景を呈しつゝある所以の一斑を紹介せんことをつとめ。併せて從來闇黒の裡に埋伏せる由緒ある舊跡の發揚に意をいたしたり。

本書巻頭の市街地圖は寧ろ市街の三面を包圍せる公園其ものゝ地勢通路等を示すを以て主とせり。蓋し黒線を以て表したる周圍公園の通路はいづれの處に於ても山海の眺望に富みて新生面を開かざるはなく。頗る趣味ある遊覽線たるを以てなり。其名勝の符號点の如き讀者必ずしも拘泥するを要せざるなり。

一本書編纂の材料は總て最新の事實に據り調査せり
 一本書中一部の記事は匆卒の編纂にかゝり。誤謬疎漏の点なきを保せ
 ず。讀者幸に示教を玉はんことを

明治三十六年三月

著 者 識

嚴島案内記目次

嚴島町市街及其附近公園地圖
 御山登山順路略圖
 名勝舊跡寫真版二十四個

第一編

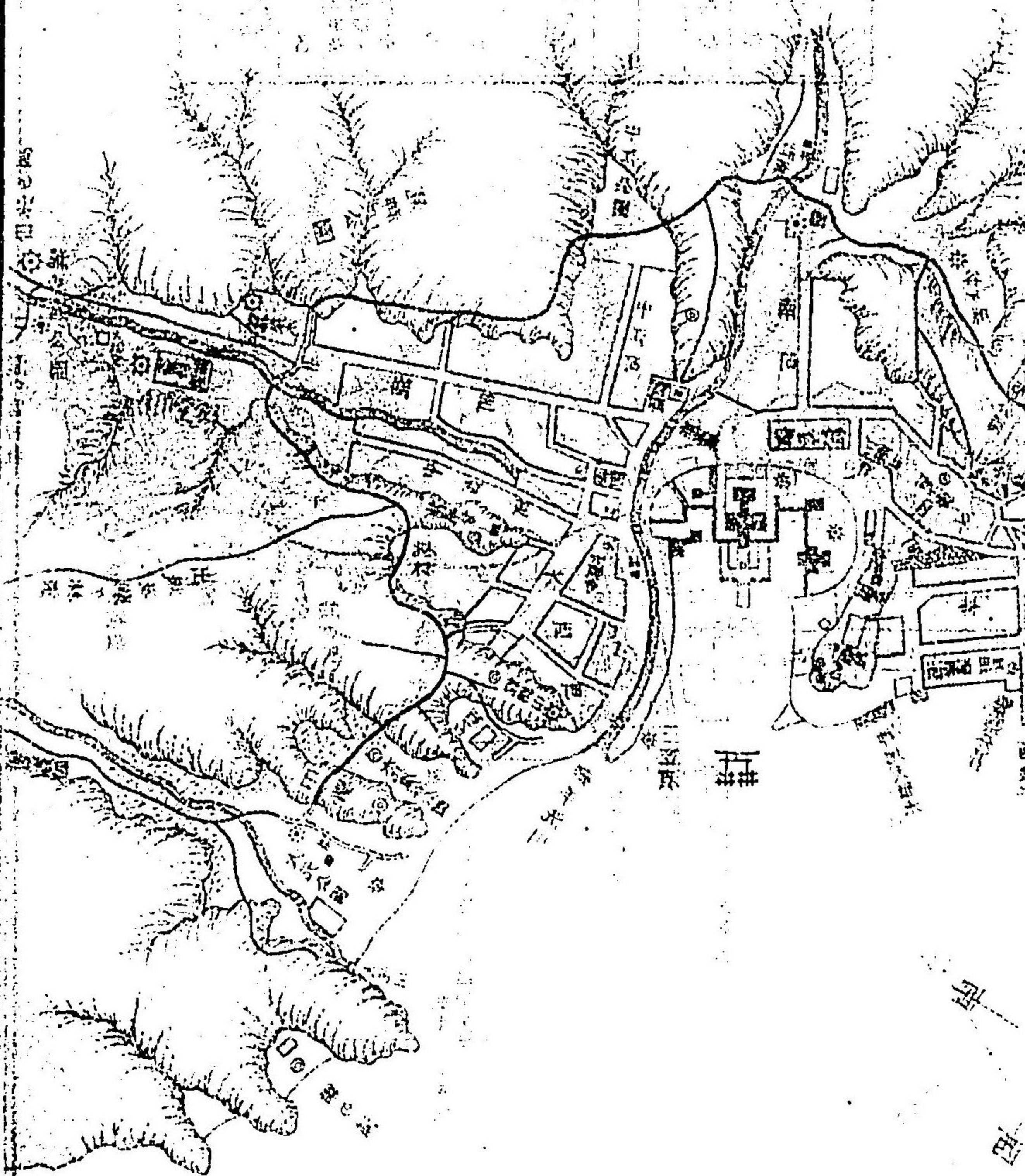
嚴島の地勢及概況
 嚴島神社
 御鎮座
 歷朝崇敬の一斑
 殿廊の結構
 大華表
 年中祭事(官祭私祭)
 本社の國寶
 本社の寶物
 本社の繪馬
 社頭の明燈(八景の二)
 鏡池(八景の二)
 三笠濱(八景の二)

一丁	康頼卒塔婆の趾	三十三丁
	康頼の石燈籠	三十二丁
	寶物陳列館	三十一丁
	寶庫	三十丁
	文庫	二十九丁
	御衣裳藏	二十八丁
	御厩	二十七丁
三丁	三翁神社	二十六丁
六丁	御花島	二十五丁
八丁	御幸松	二十四丁
十二丁	千疊閣	二十三丁
十四丁	五層塔	二十二丁
二十丁	廣島縣壯兵殉難碑	二十一丁
二十五丁	第二編	二十丁
二十六丁	嚴島町市街及其附近に於ける名勝舊跡	十九丁
三十七丁	有の浦 <small>(八景の二)</small>	十八丁
三十八丁	尼洲	十七丁
三十九丁	大願寺	十六丁

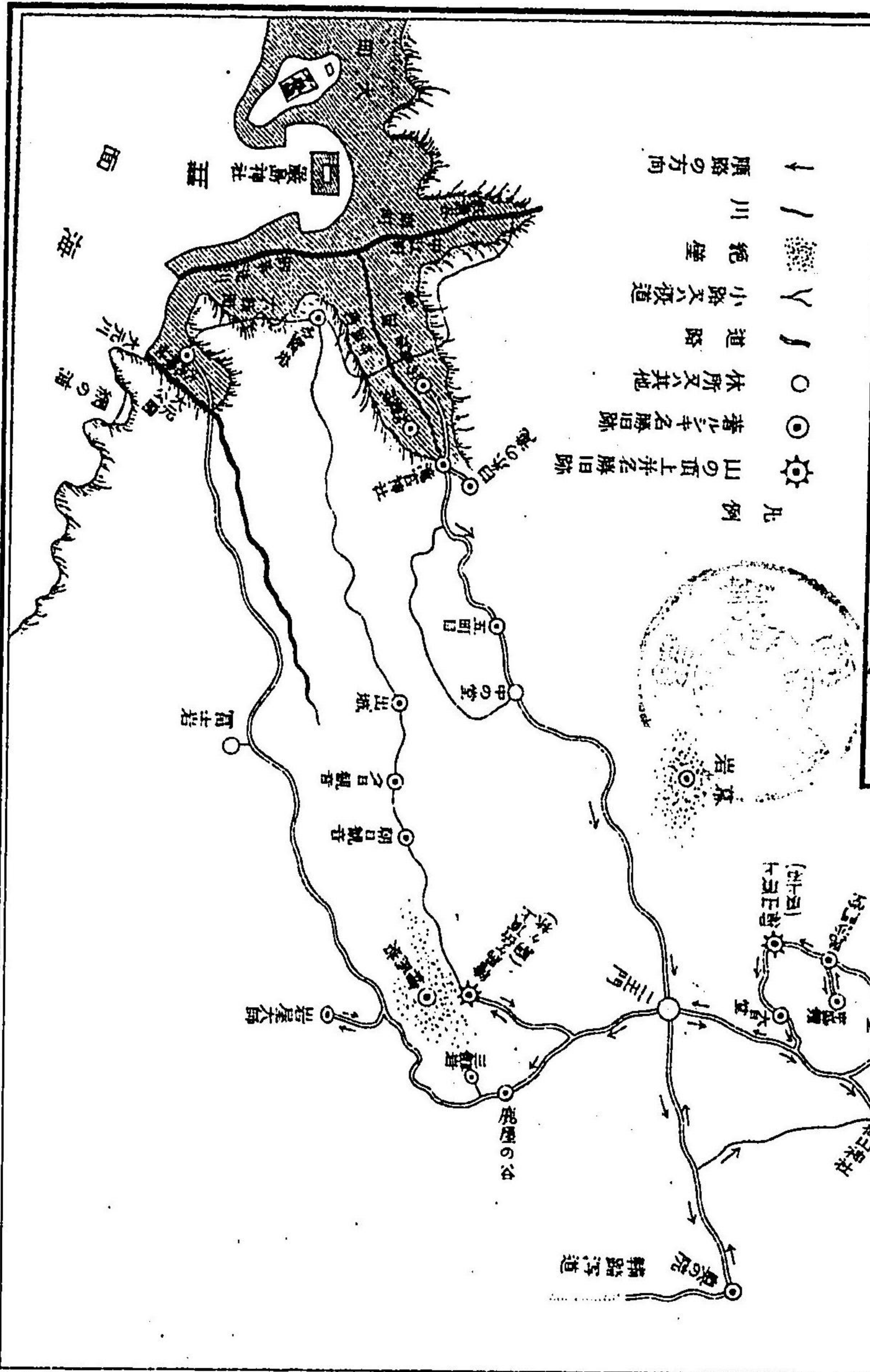
住吉神社	三九丁	瀧の尾公園	五四丁
石風呂	四十丁	寶壽院	五四丁
木比屋谷公園	四十丁	金石地藏	五五丁
大元公園(八景の二)	四十丁	梅林	五五丁
大元神社	四三丁	長濱公園	五五丁
經納山(落盛山)	四三丁	海水浴場	五六丁
多寶塔(三重塔)	四四丁	長濱神社	五六丁
出城	四四丁	要害山公園	五七丁
大聖院遺跡	四五丁	宮尾城墟	五七丁
瀧宮公園	四八丁	今伊勢神社	五八丁
白糸の瀧(八景の二)	四八丁	存光寺	五八丁
瀧宮神社	四八丁		
瀧見岩	四九丁	第三編	
紅葉谷公園	五〇丁	御山	五八丁
光明院	五二丁	御山の開基	五八丁
谷ヶ原(八景の二)	五三丁	一の鳥居	六〇丁
鳥居松公園	五三丁	懺悔地藏及其他	六〇丁
稱名庵	五四丁	祈不動遺跡	六〇丁
		御幸橋	六〇丁

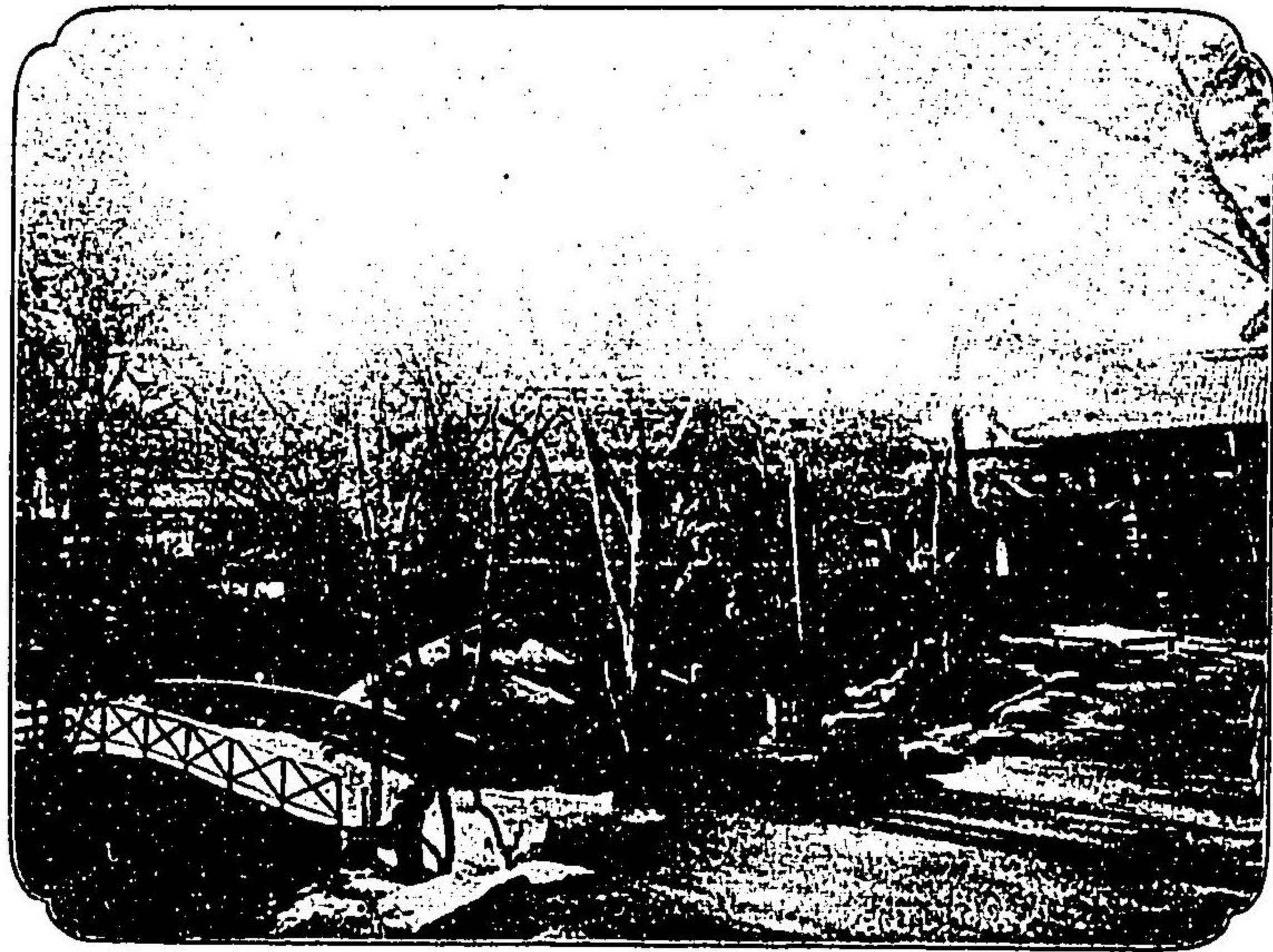
五町目	六二丁	船岩	六九丁
中の堂	六二丁	大日堂	六九丁
岩屋薬師	六二丁	目洗薬師	六九丁
幕岩	六二丁	三界萬靈水掛地藏	六九丁
二王門	六二丁	水晶石	六九丁
御山神社	六三丁	奥の院 <small>(大師堂(籠所)綱勒堂 (水手向地藏其他)</small>	七〇丁
御山神鴉の由來(八景の二)	六三丁	御山二王門より以西に於ける名勝舊跡	七〇丁
求聞持堂(本堂)	六四丁	鹿屋谷	七〇丁
<small>掛杖権。關御水 曼陀羅石</small>	六四丁	三劔岩	七〇丁
三鬼神社	六六丁	岩屋大師附近の風景	七二丁
鐘撞堂	六六丁	繪馬岩	七二丁
毘沙門堂	六六丁	龍ヶ洞	七二丁
石洞門	六六丁	駒ヶ林古戰場	七三丁
岩屋不動	六六丁	第四編	
此邊一帶の風景	六七丁	七浦	七六丁
御山頂上(頂上石)	六七丁	島廻	七六丁
龍燈杉 龍燈	六七丁	島廻の順序及儀式	七六丁
満千岩	六九丁	浦廻及浦遊	七六丁

瀨島川市街及其附近公園地圖



御登山順路略圖





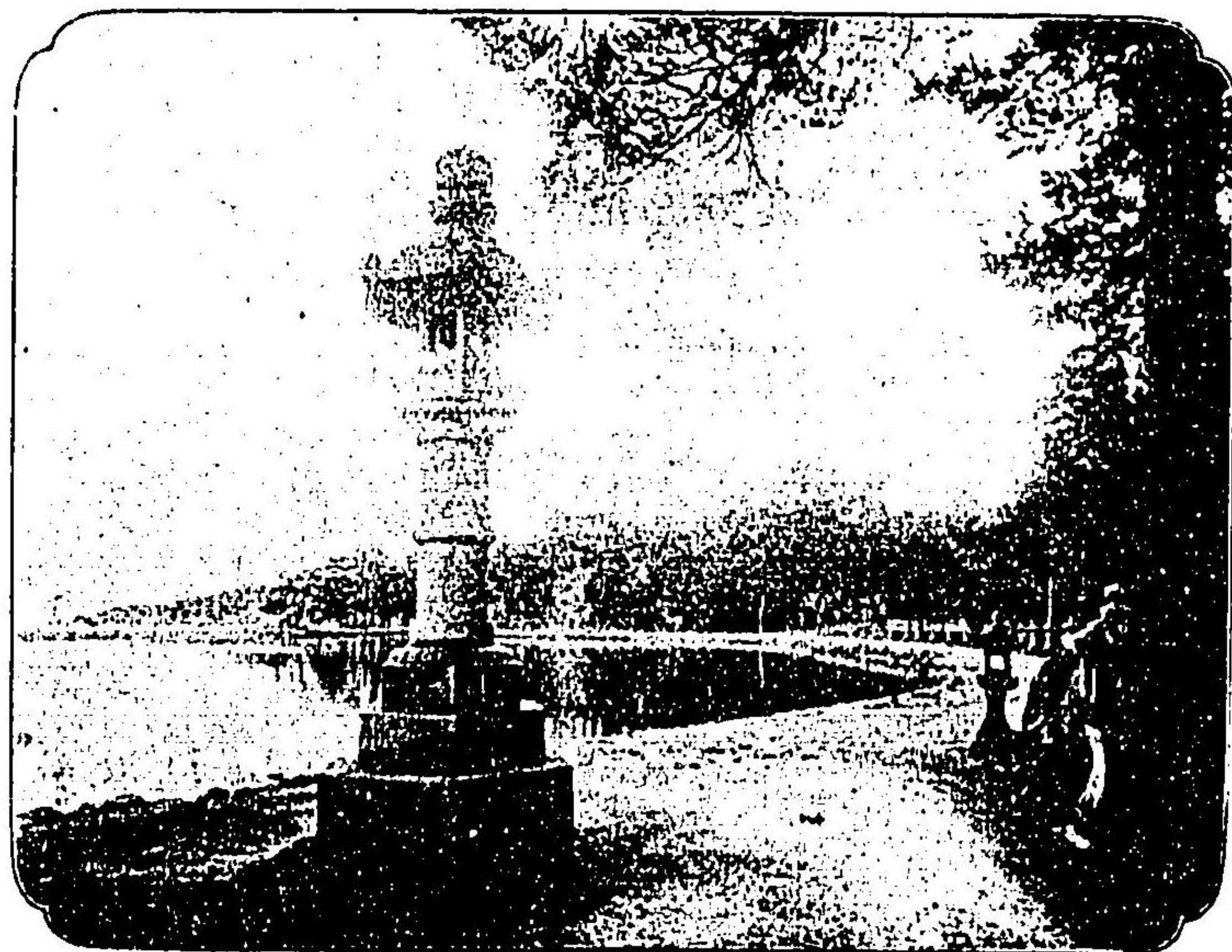
紅葉溪公園



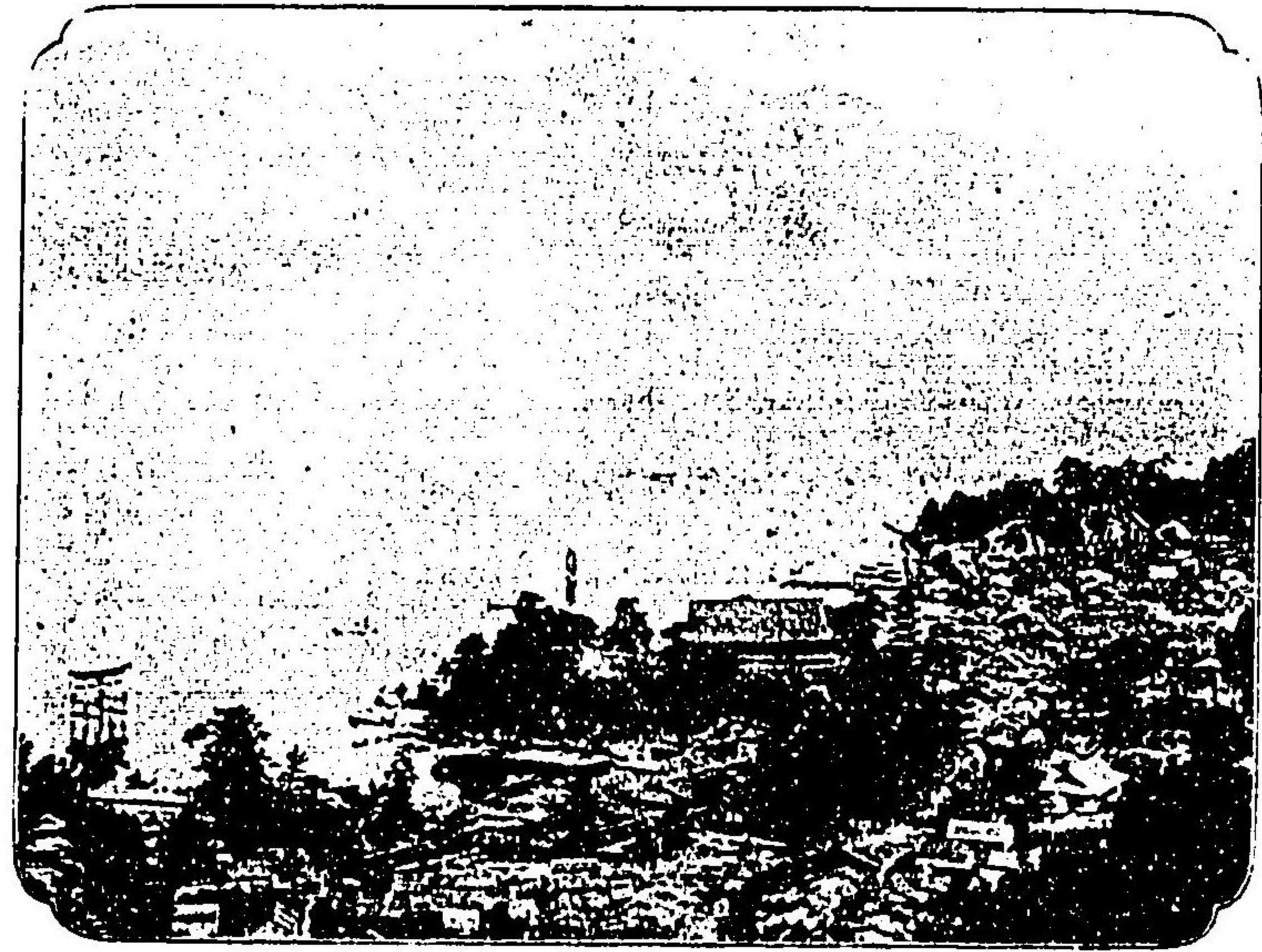
長濱公園



多寶塔



大元公園之浦遠望



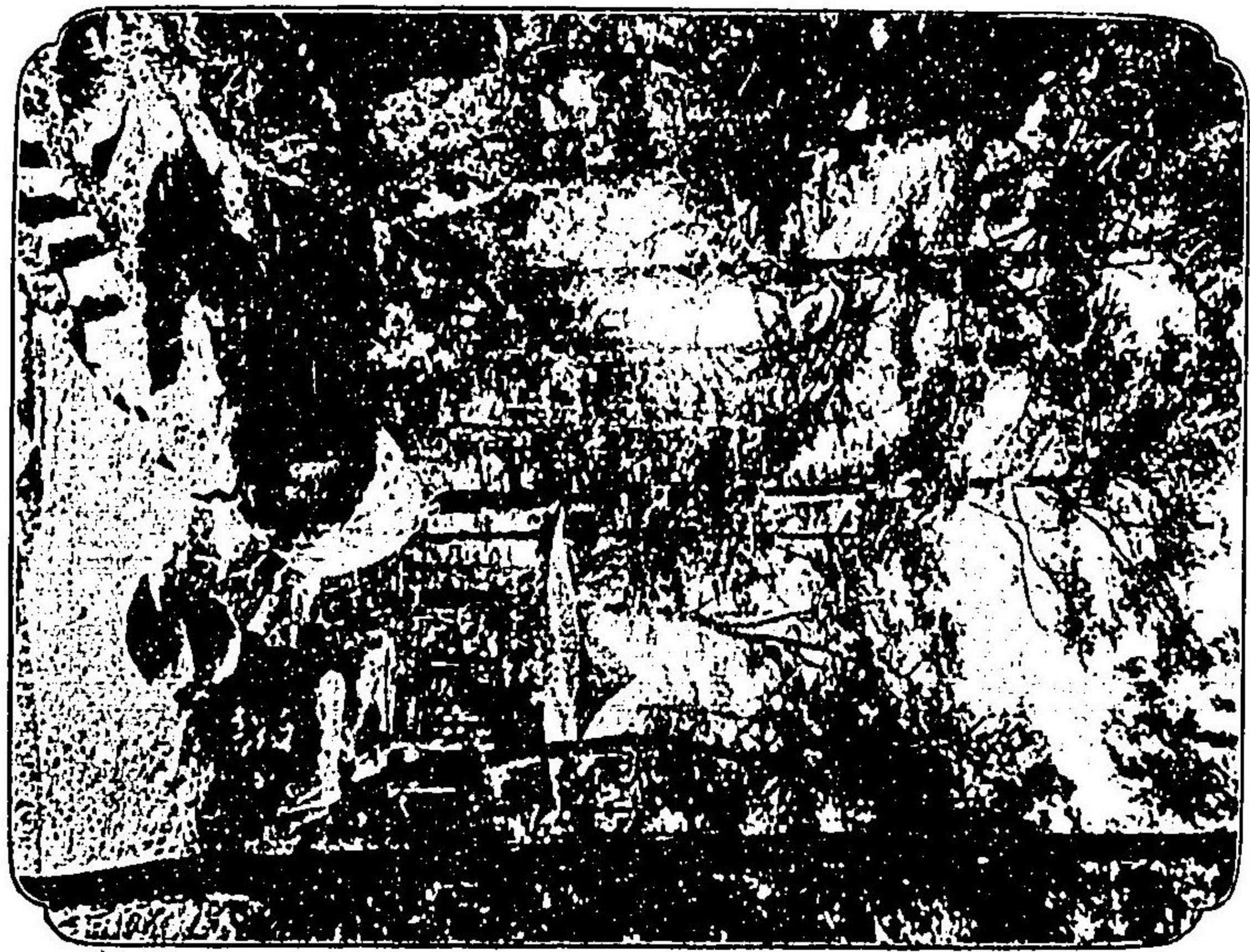
望遠街市リマ目町五山御



望遠リマ上巖大社神山御山御



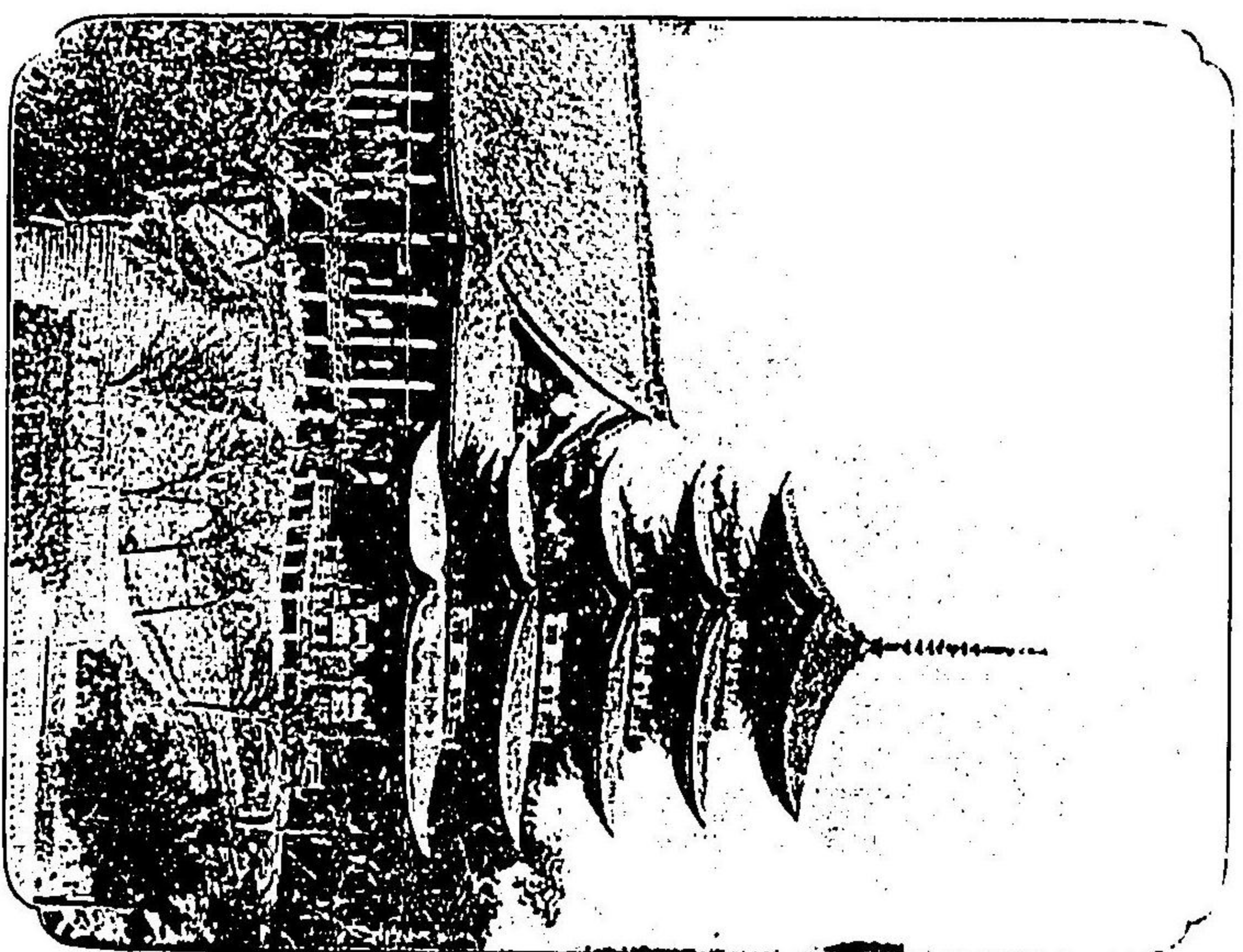
駒ヶ林



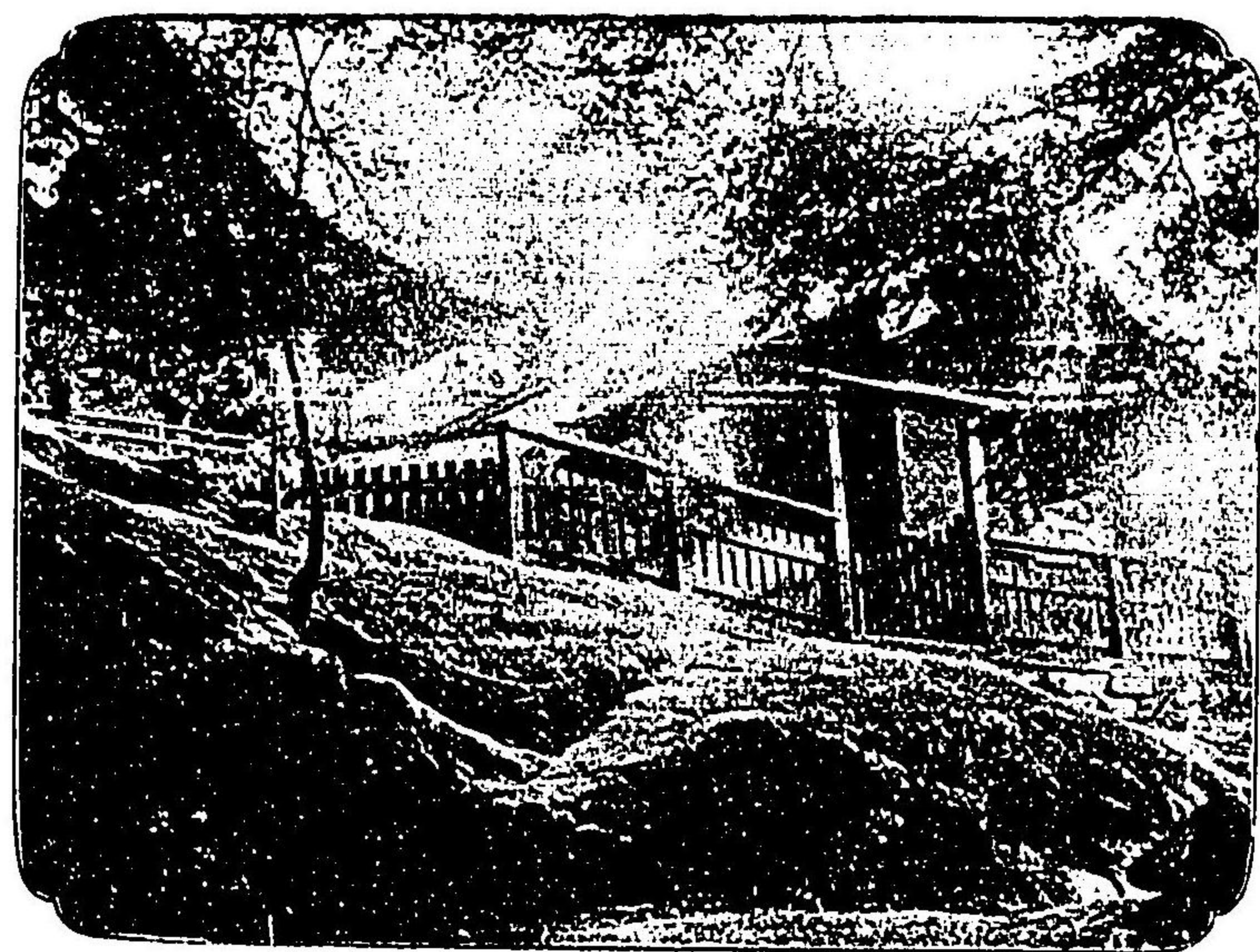
御山平崇盛之梵鐘



堂門沙昆山御



塔層五及閣壘千



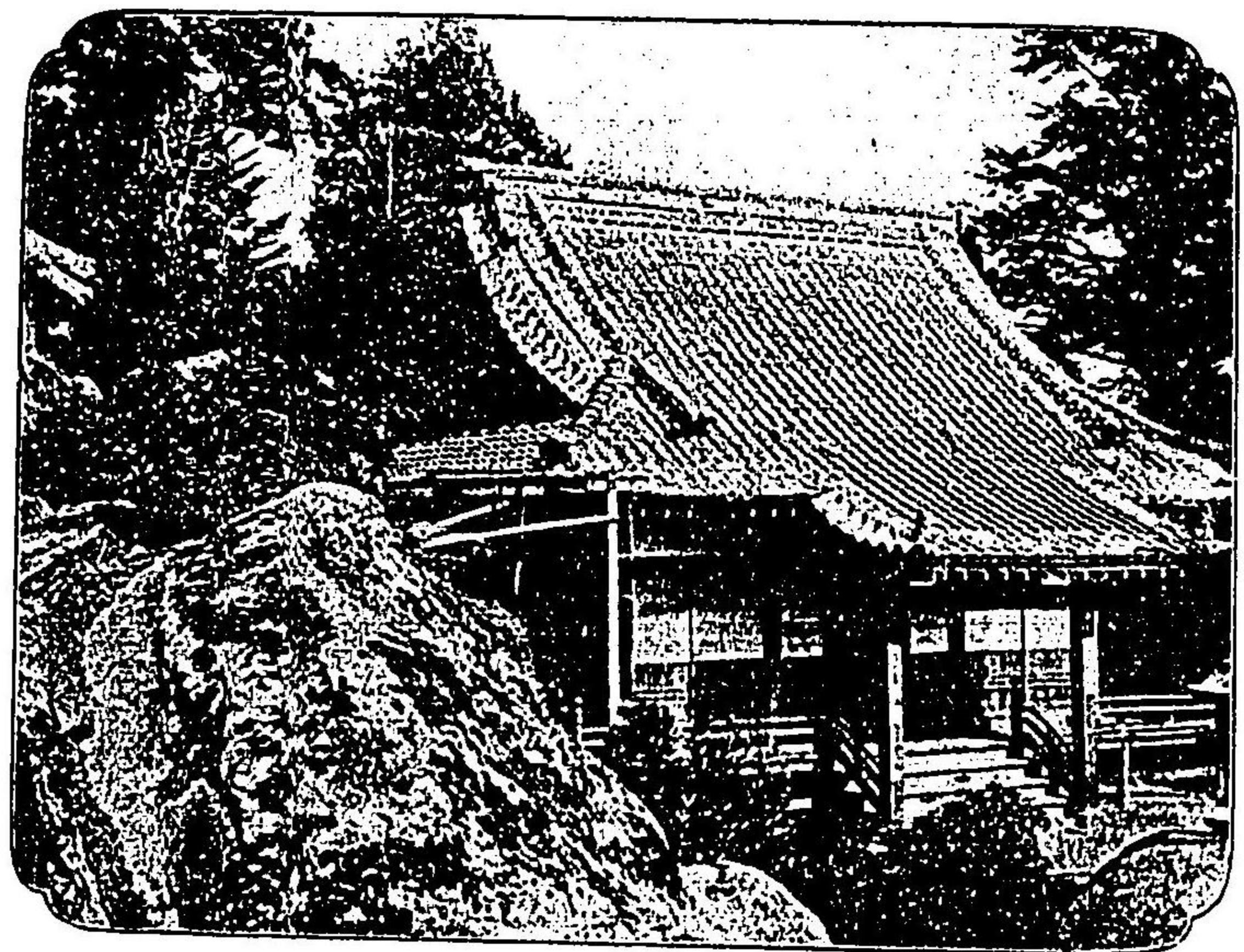
社 神 山 御 山 御



山 望 ヲ 岩 馬 繪 リ 谷 摩 護



堂 本 山 御



社 神 鬼 三 山 御



須 屋 浦



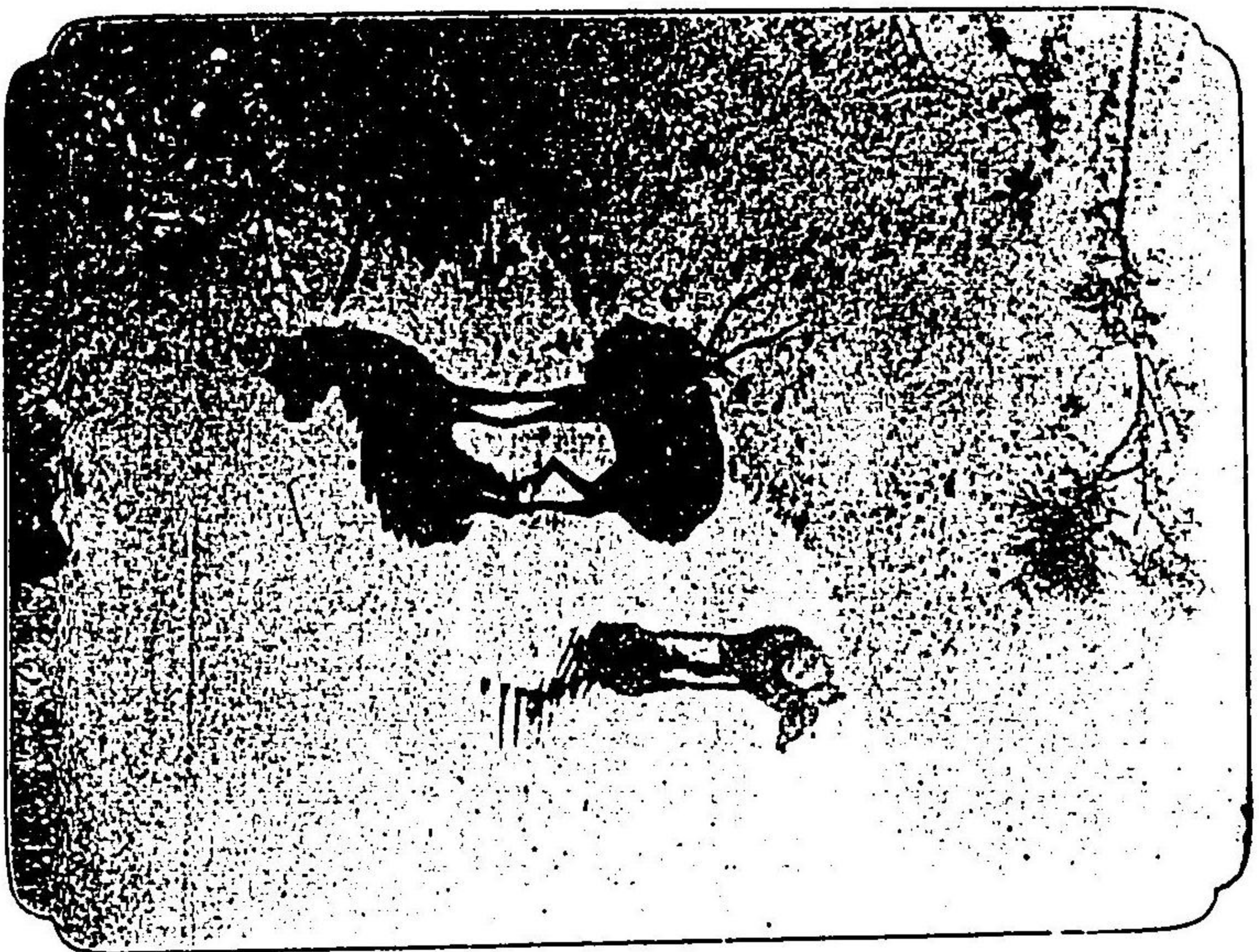
杉 之 浦



三 笠 濱



聖 崎 蓬 菜 岩



鹿神之嶋殿



草籠崎



御床浦神社



養父崎神社

嚴島案内記

第一編

嚴島の地勢及概況

我が大日本帝國海岸の地勢中最も曲折變化に富み。大に趣味を有せるものは瀬戸内海を以て最と爲す。而して此瀬戸内海中天地秀靈の氣を鍾めて粹然山水の精妙を極め。加ふるに歴史上の遺物名跡に富めるものは我が嚴島を以て最と爲す

嚴島は安藝國の海中にありて陸地を離るゝこと遠きは四五里。近きは五六町ばかり。北及西の一面は佐伯郡二十日市地御前大野玖波等の諸町村と相對し。東及南の一面は佐伯及安藝兩郡の諸島嶼と相對し。又はるかに伊豫周防の諸山を望めり。島の周廻七里三十二町餘。面積三千百四十餘町歩に達し。戸數八百二十三。人口三千二

百十九を以て數ふ。島の中央に近く御山の高峯を控へ。其周圍には大小幾多の峯巒山脈起伏蜿蜒して四方に延びわたり。地形東北より西南に向ひて長く。不規則なる長方形を劃せるを見る。市街は島の西北面に位し。塔の岡及龜居山千疊閣を中央として東西の兩部に分れ。更に之を別ちて十八區と爲す。其東部市街の沿岸は即ち嚴島港にして。多數船舶の繫泊に適し。町内には町役場小學校を始め。警察分署憲兵出張所郵便電信局國有林保護官舎銀行支店及棧橋會社等の機關備はらざるところなく。交通又至便。氣候温和にして寒暖度に適し。土地清潔。水質清晶。空氣又極めて新鮮あり町民の大半は木竹細工を以て産業と爲し。輻輳物杓子類竹細工彫刻物等其大部を占む。近年交通機關の開發に伴ひ。參詣來遊者の數年を逐ふて増加し。産物の販路。又其改良進歩と與に漸年盛況を呈するに至れり

本町は元伊都岐島と稱ふ。蓋し市杵島姫命の鎮座せるより伊都岐(市杵伊都岐國)と稱へたるものなるべし。古の諸史皆此稱を用ひたり。近世専ら嚴島の稱を用ふるも又伊都岐と通はして慣用せる所なるべし宮島の稱も其起因は大神の宮居し玉ふより出でたるものにて。其唱呼既に久しく。高倉帝行幸記に宮島と記しあるを見ても知るべきなり

入海の八十浦かけて十島ある

小野 篁

恩賀しまのすかたはをのづから

在原業平朝臣

よもぎの山もこゝにありけり

嚴島神社

嚴島神社は天照大神の御女子。市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を齋

祀れるところにして。三神與に大神の詔のまに。高天原より豊葦原の中國に天降り座て。皇御孫命を輔け。又皇御孫命の爲に齋かれたまふ。而して市杵島姫命が我が嚴島に降臨ましませし時代は。其年歴頗る悠遠にして。今俄に考ふべからずと雖も。推古帝時代より以前既に本島に降臨まし。御山足引宮に御鎮座ありし事蹟は照乎として明かあり。推古帝の朝に至り。當郡の守佐伯鞍職。御神託により官奏を経て宜下を蒙り。島内の長老所翁と與に力を併せ。御笠濱の大石小石を切り平け。奥山に繁立てる大木小木を伐り採り。清き荒磯の底津磐根に宮柱太敷立て。常世の神籬と定めて。かの足引宮より市杵島姫大神を遷して鎮め祭り。又田心姫命湍津姫命の二神をも配祀り。又相殿に國常立尊天照大神素盞鳴命の三神を祀り。又客神社に於て。正哉吾勝勝速日天忍穗耳命天穗日命天津彦根命活津彦根命熊野樺樟日命の五神を齋奉りたるは同帝の御宇即位元年癸

丑十一月十二日のことにして。今を去ること正に一千三百十一年。嚴島神社御鎮座の基礎茲に定りたるなり

是より五百餘年の星霜を経。社殿の荒廢甚しかりしか。當國の主平清盛靈夢の感により。大に土木の工を興し。神領を増加し。經營數年を重ねて社殿を改め造り。百八間の回廊を起し。大鳥居攝社末社に至るまで盡く改造し。其壯麗美觀遙に前古に卓出するに至れり
爾後明治維新に至るまで。始ご七百年。上は朝廷を始めとし。歴代の名門武將等か或は神領を増加し。或は社殿を造營し。或は寶物を藏め。或は本社に參籠して親しく并禮をつとめたる等。其崇敬のみかくをろかならざりし事蹟は枚舉に遑あらざるなり。上にして既に然り。下億兆の崇敬に至りても又これに譲らず。參詣の輩雲霞と共に四時去來を絶たず。誠に本邦の大社皇國の守護神

にして。其神徳の壯嚴なる。今や益遠く宇内萬邦に輝きわたる。仰がぬものこそなかりけれ
明治三十二年四月五日。内務省本社の建物を以て特別保護建造物に編入し。次で今回大修繕の舉あり。神殿の壯麗前に數倍し。神徳ますく新たなり

やはらぐる光りも高き宮島の
神にあゆみをはこぶ諸人
海原やまたもたくひは浪の上に

中納言持豊

宮居しめたる殿島かる

石川 丈山

恭惟市杵島姫命。神聖靈蹤益壯哉
廟貌巋然浮海水。怪看蜃氣吐樓臺

歷朝崇敬の一斑

承安四年三月十六日後白河法皇御臨幸座まし本社へ御參詣あり。同

年四月九日還御あらせらる

治承四年三月十九日高倉天皇御臨幸座まして本社へ御參詣あり同年

四月九日還御あらせらる

治承四年九月二十二日高倉天皇再御臨幸座まし本社へ御參詣あり御

願文を納め玉ふ

安元元年十二月大介藤原朝臣を勅使として御供田十三町一反を寄せ

同二年神領として高田郷を寄せらる

弘安四年元寇來侵の際執權北條時宗より數日間異賊降服の御祈禱あ

り。其後正應六年に至り執權北條貞時より因幡國船岡郷を奉納す

建武三年二月十八日足利尊氏本社へ參詣し願文及劍銘友成を獻じ。

參籠して大神の加護を祈り。貞和四年八月二十六日に至り當國己

斐村の地を獻し。廻廊以下造營の料に充つ

天文十年七月五日大宰大貳大内義興祠官に命じて廢典十一條を再興

せしめ。同十一年五月二十日、鎧一領、太刀一腰、神馬一頭を獻す。
 天正十五年三月、豊臣秀吉肥前名古屋へ出陣の途、次本社へ参詣して、大
 神の冥助を祈り。凱陣の後、毛利輝元に命じて大經堂(今之千)を建設
 せしめ、且つ一萬石の寄進状を納む。

其他朝廷を始めとし、平氏の諸將候は勿論。源頼朝、同實朝、征夷大將
 軍頼經、同頼嗣、同惟康、親王、同久明、親王、足利義昭、大内義弘、同義隆、毛利
 元就、同輝元、福島正則、淺野藩候等よりも、屢神領の奉納贈位の沙汰(古
 神領位は神に位階を授くるにあり、す、寶物奉納等の事ありしことは枚
 舉に遑あらず。以て其神徳の壯嚴なる一斑を推察し奉るべきなり

- 本社本殿 祭神 三座
- 市杵島姫命(主神) 田心姫命 湍津姫命
- 相殿 三座
- 國常立尊 天照皇大神 素盞鳴命

- 一本殿 梁間 六間 三尺六寸 桁行 十三間 二尺三寸 御鎮座の正殿をいふ
- 大床 幅五尺
- 幣殿 梁間 三間 一尺五寸 桁行 三間 一尺八寸 正殿の前にあり
- 拜殿 梁間 六間 七間 四尺四寸 幣殿の前にあり
- 稜殿 梁間 六間 四尺八寸 桁行 十三間 三尺八寸 拜殿の前にあり
- 高舞臺 梁間 三間 四尺 桁行 三間 四尺 稜殿の前にあり
- 平舞臺 高舞臺の前後左右をいふ 面積百八十六坪あり
- 樂房 梁間 二間 五寸 桁行 五間 五寸 二宇左右に別れて平舞臺に連る
- 廊嘴 幅 一間 五尺三寸 長 七間 一尺三寸 平舞臺の前端をいふ
- 門客神社 廊嘴の左右にあり。俗に沖惠美須と稱す。豊磐間戸
 命及櫛磐間戸命を祀れり
- 廻廊 幅 二間 二尺 長さ 百四十八間 二尺にして本社の左右に
 延長し。曲々節を爲し一間毎に鐵燈籠を釣れり。こ

れ百八燈の一にして杜頭の明燈と稱し。嚴島八景の一に數ふ

客神社 祭神 五座

正哉吾勝勝速日天忍穗耳命。天穗日命。天津彦根命。活津彦根命。熊野椴樟日命。

- 一本殿 梁行 五間二尺三寸 桁行 七間五尺五寸
- 一大床 幅 四尺六寸
- 一弊殿 梁行 二間三尺五寸 桁行 二間四尺七寸
- 一拜殿 梁行 四間一尺八寸 桁行 十三間二尺
- 一板殿 梁行 五間一尺四寸 桁行 五間三尺五寸
- 一揚水橋 本社の東隣にあり 幅 二間五尺 長 三間
- 一朝座屋 本社と客神社の間にあり 梁行 五間一尺五寸 桁行 十一間八寸

此處に講社事務所の設あり

大國神社 本社の西側にあり。祭神大國主命

天神社 祭神菅原道真公にして大國神社の西にあり

長橋 本社の西隣にあり 幅 一四四尺八寸 長 十八間

反橋 長橋の西にあり 幅 二間二尺 長 十二間三尺

能舞臺 本社西の西にあり 舞臺三間四面の外脇座二尺四寸地謡座九尺 橋長七間幅一間樂屋五間に三間とす

一行宮の遺跡。今の能舞臺邊是なり。治承四年三月高倉天皇御臨幸の際。此處に行宮を設けさせ玉ひしと云ふ

一大華表 本社廊下(火燒前)を距ること八十八間。巍々として三笠嶺頭の大偉觀を爲せり

一柱高 七間二尺五寸

一全廻 五間三尺三寸

一棟長 十二間一尺七寸

一 總高 八間三尺七寸

一 副柱 高四間四尺廻三間

一 袖貫 長六間六寸幅二尺四寸五分厚九寸

一 屋根幅 片流二間六寸額庇二尺七寸長く出づ

一 上棟より軒先まで。一間六寸

一 兩柱左右の距離。五間五尺八寸

一 扁額 際一間二尺六寸横五尺八寸

是故有栖川二品熾仁親王殿下の御染筆にして。表裏二面あり。表に嚴島神社。裏に伊都岐島神社とあり。また以前の額は後奈良帝の宸筆にして大内義隆の奉納にかゝり。古代此大華表も本社創建と同時に建設せられ。數度の改造を経たるに。現今のものは明治七年十二月工を起し。翌年七月に至り功を竣へたるあり

此大華表の汀に宮翠只とて。間々宮殿又は鳥居の形狀を模様に見はしたる。一種のあさり貝を産することあり

遠島の下つ岩根の宮はしら

玄旨法印

波の上よりたつかごぞ見る

似雲法師

さす潮も光をそへて島の名の

釋 自体

宮居すゞしき夏の夜の月

德大寺江月

水是潮兮山是島。山光相映落波瀾
不離常處神仙境。百八廻廊一社壇
後青山兮前水濱。德輝嚴島大明神
今霄有心萬燈閣。百八廻廊月一輪
天下名區市杵島。仙查况問月花秋
龍燈光失海心火。蜃氣象鮮波上樓

留急神鴉鴉欲下。砂明瑞鹿曉猶遊
人間伊境真難得。應向廣寒宮裏求

本社の祭事

殿島神社の御祭事中最も盛大なるは管舩祭にして。これに次で有名なるものを年越祭延年祭桃花祭及鎮火祭と爲す

年中官祭

元始祭。一月三日之を行ふ。神饌祝詞神樂及奏樂あり

祈年祭。二月中臨機時日を定めて之を行ふ。班幣縣廳に着して縣知事又は書記官來島の上勅使奉幣式を執行し。神饌祝詞神樂及奉樂あり

例祭。六月十七日之を行ふ。奉幣使參向の儀前に同じ

大祓及鎮火祭。十二月三十一日之を行ふ

神前に於て祭典執行の後。當日午后六時より千疊閣下海岸通神地内に於て松明式あり。東西の町民より奉獻して點火せるところの大炬小炬數百本。交互東西に奔走して之を焚き頗る壯觀を極む

東西、曲巷人猶鬧。百八廻廊燈未銷
半夜鐘聲報新歲。臨砂萬炬汲春潮
以上の外なほ左記の御祭典あり

登々巷

- 一月一日 神饌祝詞奏樂あり。二月以下毎月一日之に準ず
- 一月三十日 孝明天皇祭 二月十一日 紀元節
- 四月三日 神武天皇祭 六月三十一日 大祓式
- 九月十七日 神嘗祭 十一月廿三日 新嘗祭
- 十一月三日 天長節 而して以上皆神饌祝詞奏樂あり

年中私祭

神衣獻上祭。毎年一月一日午前一時を期して祭典を執行せられ。

宮司御神衣を奉じて内陣に獻じ奉る。是れ太古大神が本島へ渡らせ玉ふに當り周防國和木浦に於て。先づ神衣を更め奉りたるより起りたるものありといふ

年越祭。陰曆正月六日之を行ふ

幸福ある新年を迎へんとて遠近より参詣するもの萬を以て數ふ。此夕諸方の商人祓殿に群集し。當年出來秋の穀物豫想相場を立つるの古例なるが概ね暗合すといふ

桃花祭。陰曆三月十五日之を行ふ。桃花を獻じ曾利古、萬歳樂、散

手、陵王、一曲、延喜樂、貴徳、納曾利等の舞樂を演ずること古例あり。翌十六日より十八日まで三日間能舞臺に於て神能の執行あり古來神聖なる祭典の一として嚴正に執行せられたり。殊に其衣装は大内家毛利家淺野家より奉納せられたるものとて。其錦繡綾羅の類現代製品の及ぶべからざる逸品妙なからずといふ

管舩祭。陰曆六月十七日之を行ふ。本社年中の大祭にして。其盛大

あること關西第一の祭事と稱せらる。この祭典は新造船三艘を組み合せ。其上に御座を設けて屋形を構へ。周圍に幕を張り。艦の方には神鏡を懸け。舳の方には寶劍玉鉞を建て。又屋形の周圍には提燈數十個を釣り。中央に神輿を載せ奉り。而して神官其左右背後に列座し。水主に至るまで烏帽子を冠り素袍袴にて各棹をとり。篝火を焚き。其服装いと壯嚴優美なり。又引船三艘左右櫂を揃へて前にたち。御供船盛装して其後へに隨ふ。御船は午后四時大鳥居沖より外宮ある地御前神社の廣前に渡らせ玉び。神事奏樂あり。終りて後歸路長濱神社及大元神社沖に於て管舩あり。是より大鳥居をくゞり客神社の前にて奏樂前の如く。後御船を本社廣前にすゝめ。管舩を奏しつゝ御船を三回めぐらして神事あり。それより本社に還御あらせらるゝの典例ありとす

當祭典數日前より參拜者及參拜者の船舶遠近各地より廣集し。殊に當夜は漁船と和船とに論なく。各船競ふて其橋頭に幾多の紅燈を点して獻燈せるに依り。幾萬の紅燈海面を蓋ひ。頗る壯觀を極む

千百竿燈映碧流。綺羅爭艷木蘭舟

適處

急絃豪管隨潮去。散作神娥洲畔秋

延年祭。陰曆七月中に於て臨機時日を定めて之を行ふ。玉取延年祭と稱するもの是なり。當祭は御池の内本社前面の海中に於て。長さ三間餘の圓柱四本を方二間餘の距離内に建て。上部に横木を渡し。の如く組み。上部に於て狭く下部に於て廣くし。四面に七五三繩をはり。而して其中央に方五尺許なる臺を釣るし。中に三寶へ載せたる寶珠即ち玉を置くなり。本社祭事の終りつる頃。此寶珠を載せたる臺を綱にて上下すれば。數百千人の壯丁裸體にて海に入り。海水中に於て其玉を争ふ。寶珠三寶より落下するや。群衆互に鯨波を擧

げて之を揉み合ひ。上になり下になり之を争ふさま。其壯觀いはん方るし。而して勝敗決し。寶珠を得たるもの之を事務所に報ずるに至りて止む。世語係此報によりて直に寶珠を點檢し。御神札及寶珠の外米俵金帛等の供物を賞賜せらるゝ例あり。此寶珠を得たるものは未來の幸福を追求し。畢生の名譽とせるあり。此日祭事を見んとて各地より群集せるもの恰も堵の如し

右の外るほ左記の御祭典あり

- 一 一月二日二の祭舞樂あり
- 一 一月三日三の祭舞樂あり
- 一 一月四日斧始式あり
- 一 一月五日地久節舞樂あり
- 一 二月上旬未申日御鎮座祭あり
- 一 三月十七日靈神祭并に講社安全祭あり
- 一 五月十五日講社島廻式あり
- 一 九月十五日菊花祭舞樂あり
- 一 九月十七日靈神祭并に講社安全祭あり
- 一 十月十五日講社島廻式あり

十一月初中の夜御鎮座祭あり 十二月卅一日大祓祭あり
本社ほんしゃの國寶こくぼう (百〇二點てん)

一平家へいけ一門書寫經卷もんしよのきやうかん 三十三卷さんじゅうさんかん

平氏へいしの一門清盛以下三十二人の公達きんたうが數年の歲月としづかを費やし。各精神おのこゝろをこめて手づから左記さきの諸經文しよきやうもんを書寫しよしよし。以て本社ほんしゃに奉納ほうのうせし所ところにかゝり。是實これじつに本社寶物ほんしゃたからもの中の白眉はくびと稱なづせらるゝものなり [中經卷の紙]

品しん其他奇異たがひの模様もようあり若色わかしよ善美ぜんびを盡つくし軸しやくは多く水

一法華經ほつげきやう各編かくへん 二十八卷にじゅうはつかん 一無量義經むりやうぎきやう 一卷いっかん

一觀音賢經くわんおんけんきやう 一卷いっかん 一阿彌陀經あみだきやう 一卷いっかん

一般いぱん若經にやきやう 一卷いっかん 一清盛願文きよせいがんぶん 一卷いっかん

一平家納經函へいけのまきやうたん [總高一尺二寸四分、横九寸六分、深七寸八分、蓋高二寸二分]

銅製臺附三重ニグロメにして。金銀きんぎんを鏤うらめたる雲龍五輪等うんりゆうごりんとうを置金物おきかねものとし。其製作そのせいさくいと優美ゆうび巧妙きやうめうなり。これ前顯ぜんけん三十三卷さんじゅうさんかんの經卷きやうかんを納おさめた

る内函うちびんにして。平家へいけの奉納ほうのうにかゝれり

一平家納經薦へいけのまきやうせん時繪唐櫃ときえいとうび [深一尺四寸六分、横一尺七寸八分、蓋深二寸五分]

黒塗模樣くろぬりもよう桐葉とうえ金時繪きんときえいにして。金物かねものは總すべて金きんやきつけいと美麗びれいなり。

同上經卷どうじやうきやうかんの外箱がひはこにして。福島正則ふくしまのりの寄附よきふにかゝれり

一法華經七卷ほつげきやうしちかん 箱入はこいり

一平清盛及弟賴盛へいせいとあにのりの兩筆りやうひつなり

一納經箱のきやうはこ 一個いっこ

一光明皇后御筆法華經八卷こうみやうこうごうのまきやうほつげきやうはつかんを納おさめたり

一平重盛甲冑へいしげうのまきやう 一領りやう

製作せいさく質しつ撲ぼくにして堅牢けんろうなり。公こうの用もちゐられたる所ところなりといふ

一新羅三郎義光甲冑しんらさんらうぎこうのまきやう 一領りやう

一武田氏累代の重寶ぶくだしるいのだいじゆうぼうにして。大内義隆おほうちぎらうの奉納ほうのうにかゝれり

一小櫻威甲冑こさくらおびのまきやう 一領りやう

なかくの尤物。千載の逸品なりといふ

一 大内義隆甲冑

一 領

南都の人春太光信の作にして。大内義隆の奉納せるころ

一 高倉帝御扇

一本

扇面の歌は久我通親郷の手跡にして。高倉帝本島へ行幸の際納め玉

ひし所あり

一 安徳帝御玩具

六種八点

御産衣。御笏。御飾太刀。御石帶。御籠。御槍扇三本

一 松喰鶴時繪小辛櫃 (一) 深八寸、横一尺五分、足二寸

安徳帝の御産衣を納めまゐらす所にして。黒塗時繪松喰鶴の金銀模

様あり。中宮國司從四位下佐伯景弘朝臣の調進せるころとす

一 文臺硯。大内義隆の奉納せる所なり

一 奚。 (一) 皮直り廻り二尺三寸九分、高六寸五分、朝廷よりの御寄進也

一 鏡。 胴及皮金地極彩色にして古色あり。又朝廷の御寄進也

一 琴。 平重衡の愛玩せる所にして。唐の雷家の作なりといふ

一 佛器。 (一) 五鈷鈴、三鈷。 弘法大師の所持品なりといふ

一 大鳥居扁額

後奈良帝の御染筆にして。大内義隆の奉納にかゝれり

一 紙本墨書御判物帖

壹綴

本社の御神領寄進狀及制令等。眞筆にかゝる古書類を集綴せしもの

なり

一 檜扇。 平氏の奉納せる所なり

一 赤梅檀佛像。

箱入

佛像二十一體の精巧なる彫刻にして。昆首銅座の作ありといふ。納

むる所の箱黒漆堅地にして。模様は優美なる金金具とす。印度又は

支那古代のものゐらんといふ

一 狛犬

拾八軀

拾八軀各皆其狀貌を異にす。此類の彫刻品にては全國無比の逸品なりといふ。其高さ概ね二尺内外にして。長さ一尺八九寸の間にあり。

元社殿内に安置せしものなり

唐鞍飾馬 壹軀 同上 中身長一尺一寸五分 五厘

一 金梨地螺鈿飾太刀。二振 小大 同 中身長一尺一寸五分 五厘

一 螺鈿飾太刀 中身長二尺二寸九分 毛利輝元寄附

一 藤卷太刀 中身長二尺四寸九分五厘。 久明親王寄附

一 兵庫鎖太刀 中身長二尺一寸九分五厘。 惟康親王寄附

一 兵庫鎖太刀 中身長一尺八寸七分五厘 將軍政所寄進

一 兵庫鎖太刀 中身長二尺九寸六分。 將軍賴嗣寄附

一 嚴物造太刀 中身長二尺二寸 將軍賴嗣寄附

一 足利尊氏短刀 中身長七寸九分五厘。 足利尊氏寄附

一 同尊氏短刀箱 壹個

一 拔頭面 壹面

今を去ること七百卅四年前。承安の頃より用ひ來たれるものなり。

この面は當地神官野坂家古來相傳舞樂の秘曲にして。毎年正月五日禁裡御祈禱の際。用ゆること古例ありしといふ。これ承安三年政所の寄附にかゝり。寛政八年には天覽に供し。徹慮の書狀あり

一 還城樂 一 陵王 一 納曾利

一 散手 一 貴徳 一 探桑老

一二の舞笑面 一二の舞瞞面

以上九品。何れも皆古來本社の舞樂に用ゐ來たれるものにて。實に木彫の逸品なり

本社之寶物

本社の寶物は以上に列記したる國寶の外。夫の三種の神器に亞ぎて
朝廷の至寶たりし。玄上の琵琶及高倉帝の愛翫し玉ひたる小櫻筍を
始とし。刀劔甲冑古書畫等の類枚舉に遑あらざれども。今茲に掲載
するの餘地なきを以て之を畧す

本社ほんしゃの繪馬えうま

本社ほんしゃの廻廊くわいろう及殿内てんないに掲額けいがくせられたる繪馬えうまの數は。無慮むりょ一千餘点せんの多
きに達し。是れ皆數百年せんねん來信者しんじやの奉獻ほうけんせしところにかゝり。小は方
尺位しゃくゐより大は疊五六疊たかさ大の積つみを有し。繪くところ山水花鳥人物樓閣
草木什器動植文書及歴史上の事實等。殆んど網羅もうらせざる所なく。而
して之れが筆跡ひつせきの錚々たるもの其一斑いっぺんを擧ぐれば。

雪舟せつしゆあり。元信げんしん、常信つねしん、永徳えいとくあり。兆殿司てうてんすあり。應舉おうきよあり。文晁ぶんていあ
り。蘆雪あしせつ、景文けいぶん、東洋とうやう、應震おうしん、岷山みんざんあり。祖仙そせんあり。梅山ばいざんあり。素
絢そけん、抱一ほういつ、峻峯しゅんぽうあり。宋紫石そうしせきあり。米菴まいあんあり。士式ししき、丈山じやうざん、春水しゅんすいあ

り。恰あたも百花ひゃくか婉わんを競きやうひ。群芳ぐんぱう秀しゆを争あふの觀かんあり。是れ神社じんしゃの額面がくめんと
しては帝國ていこく内無比ないむひの大觀たいくわんを極ごくむるもの。一大美術館いちだいまいじゆつかんに入るの感かんあり。
〔大修たいしゆ耕後かうかうの殿廊てんろう内ないには建築けんちく物修ぶしゆ保管ほくわんして。其大部そのたふぶ分ぶんを掲額けいがくするの豫よ定てい
いなりと

社頭しゃとう明燈めいとう (嚴島八景げんじまはつけいの一)

ところからたつの宮居みやゐもうかぶかど
見えてつらなる浪なみのともしび

似雲法師

波間なまより見えて數あるともし火ひに

梅月堂宜阿

宮居みやゐもしるしいつくしま山やま

嚴島雲晴げんじまぐもはる飛繡ひしゆ臺たい。宮廊みやろう壯觀さうくわん壓お西瀛せいよう、

二品親王堯延

神燈波而かみとうなみ幾千點いくせんてん。添着そんじやく和光わくわう夜々明よよあ

黄檗悅峯

好山こうざん朶々たたら鏡中看きやうぢゆうかん。百尺樓臺ひやくしゃくろうたい海氣寒うみけさむ

夜有神燈光映波よにがみとうくわうえいなみ。却疑けつぎ星斗せいとう落欄干らくらんかん

一 鏡池

客神社と朝座屋との間にありて。干潮の際。洲上別に一小池を爲せり。

二十八

鏡池秋月 (嚴島八景の一)

ところから月もかゝみの池の名を

見せてや秋のかけみがくらん

みやしろにかくる光も曇なき

がゝみの池にすめる月影

羽林雅季

宜阿

海門、靈跡甲西洲。嚴島佳名千古悠

三位藤原宜通

多少、行人富觀賞。瑤池明月鏡池秋

僧獨麟

一泓、寒碧傍、靈祠。淨似菱花可鑑眉

三笠濱

最是清秋明月夜。其如漢帝影娥池。元大神の鎮ります。海内の総稱なりしも。何時の頃よりか。主として御手洗川々口ある。松原の鼻一帯の海濱を以て三笠濱と稱す。

するに至れり。此邊老松翠鬱として生ひ茂れるのみならず。右は本社殿廊に連なり。左は大元公園の翠色をひかへ。前は海を隔て、遙に佐伯郡沿海の諸山を迎へつゝ。海中に巍々たる大華表を望み。眺望頗る絶麗なり。殊に月の景色甚だよろしく。雪景又一段の佳趣あり。

三笠濱鋪雪 (嚴島八景の一)

ふりにけり三笠の濱の松が枝に

東皐

誰もみな家路わすれてきてぞ見る

美静

三笠の濱の雪の夕ぐれ

白雪重々御笠濱。平沙十里更清新

菅原在廉

夜來最覺好風色。寒月和光同玉塵

黄檗百泉

風極飛花堆笠濱。漁夫轉棹却迷津

二十九

雲林煙塢一色。更訝波神撒玉塵。

康賴卒堵婆の趾。御本殿の東側なる揚水橋の下にあり。治承元年平判官康賴。清盛の逆怒に觸れ。法勝寺入道俊寛及丹波少將藤原成經と共に。鬼界ヶ島に謫せらるゝや。都に残りたる老母を懐ひ。故郷を戀ふの餘り

さつまがた沖の小島にわれありと
親には告げよ八重のしほ風
おもひやれしぼしと思ふ旅だにも

なほふる郷はこひしきものを
といふ二首の歌に。康賴法師の銘をも併せ彫りたる卒堵婆を作り。日々作り得らるゝに随ひ。風のたよりに任せ。祈願をこめて之を流し。流したる卒堵婆の數終に千本に達しけるが。其内一本此處の石に漂着しけり。折節康賴に縁故ある京師の僧侶。康賴を慕ふの餘西

國修業を思ひたち。機を得て鬼界ヶ島にも渡り。其音信を探らんと志し。此島にわたり嚴島神社に祈願してありけるが。漂着せる卒堵婆を見て感涙に堪へず。即ちこれを神官に請じ。直ちに携へて京師に上り。康賴の老母に達し。法皇の敍覽に供しければ。法皇其志を慰ませ玉ひ。清盛又以て神慮のある所とるし。遂に康賴を赦して都へ歸されけるとなん

康賴の石燈籠。卒堵婆の漂着したる岸の上に建設せられたり。臺石より寶珠まで高さ九尺餘。佛像雲龍等の彫刻を施され。古色を帯びて風韻あり。これ康賴赦されて歸郷せし後。奉養せる所にかゝる

寶物陳列館。梁行六間桁行十二間の建物にして。本社背部御壇ク原にあり。これ明治二十八年第四回内國勸業博覽會開設に際し。賛同協會に於て建設し。後嚴島神社に寄附したるなり。爾後専ら神

社寶物の一部を陳列し。以て衆庶の縦覧を許せり
寶庫。筋違橋附近にあり。其構造は哇庫作と稱するものにして。頗
る堅牢なるものなりといふ。嚴島神社の重寶珍器等擧つて本庫に藏
めたり

文庫。千疊閣の南の下にあり。本社ほんしやの書籍を納む

御衣裳藏。本社ほんしやの裏手にあり。神能じんのう用の衣裳を納む

御廩。東廻廊口の前にあり。本社ほんしやの神馬をつなぎある處なり

三翁神社。寶物館ほうぶつぐんの東にあり。祭神さいじんは佐伯鞍職、所翁、岩木翁の

三翁にして。相殿あいでんに大己貴命、平清盛を祀れり。御殿三棟にしてい

づれも七尺二寸四方。拜殿はいでん桁行六間一尺梁行五間餘にして前に金鳥

居あり本社ほんしやの攝社せつしやにして例祭れいさいは九月二十三日とす

御花島。御本社ほんしや西部廻廊の背面。御手洗川みたらしがはに沿ひたる一條の堤坊ていはうを

いふ。堤つみの両側に櫻樹數十株ありて。三春しゅんの花月に富めり

頼 杏坪

芳野嵐山世久聞。誰知此地獨超群
蓬來宮裏花千樹。穿去一雲又一雲
花のはるあきのみや島來て見れば

道 茂

御幸松。承安四年三月。後白河法皇當島へ御臨幸の際。此處に行宮

を設け玉ひし紀念として植附たる松樹。幾多の歲月を経。數圍の巨

木となりしが。今や朽腐して丈餘の根幹を存し。なほ當代の事蹟を

追懷せしむ

千疊閣。元大經堂と稱し又俗に千疊敷と稱ふ。市街の中央なる龜居

山の岡にあり。梁間十間五尺桁行二十間棟高五十八尺椽幅八尺にし

て四方に欄干を設けたり。是豐臣秀吉公朝鮮征伐の際。九州名古屋

城に出陣の途次。嚴島神社に養して大神の冥助を祈り。凱旋の後。

文祿年中毛利輝元及安國寺惠瓊に命じて建設せしめられたる所にし

て。この堂には元釋迦如來の立像及脇士阿難迦葉の彫像を合祀せしが。維新後之を大願寺に移し。以て豊公の神祠を安じたるあり。始め此山上には楠の大樹ありて。秀で。爵々として一山を蓋ひたりしが。秀吉伐て以て夫の有名なる安宅丸新造の用材に供し。其餘材を以て此跡に大經堂を建營するの資材に補したりといふ。當閣の建築は宏壯にして雄偉。淡泊にして豁大。東西南北一点の隔壁を設けず。遠近山海の眺踞して雙眸に收むるを得べく。座して塵襟を一掃するを得べし。三百拾餘年後の今日偉人の氣宇を代表して巍々青空の風塵を拂ひ。永く天下の公堂として克く億兆の衆を容れ。緩遊の間自ら當代の英風を追懷せしむ

因に記す。明治三十四年八月十五日當閣に於て。廣島山口岡山及島根四縣聯合凱旋祝賀會を開催せらる。や。名譽ある陸海軍人將校有志のこの閣に會するもの八百十餘人。豐公征韓の役凱旋を去ること。正に三百十餘年にして。始めて此光輝ある盛典を舉げたるなり

木原桑宅

千人閣上憶豐公。會宴群雄戰功
當日豪華今已盡。林猴獨戲落花風

月夜書千疊閣梁上

清人劉之高

山高星落夜無人。踏閣垂臨碧海濱
風靜仙娥波上舞。輕々移步幾生塵

堯

熙

塙團右衛門直之

またこんと誰にもわこそいひをかじ
心になふいのちならねば

五層塔。俗に五重塔と稱す。千疊閣と相並びて龜居山の東端にあり。建物方二間半。高さ相輪頂まで九十一尺一寸。應永十四年七月の建立にかゝれり。塔内には元釋迦如來及脇士普賢並に文珠菩薩の像を安んじたりしが。維新の後これを他に移せり。内國に於て五層塔の

たり。現有寶物の主要なるもの左の如し

國寶

- 一 常寺 藥師如來坐像 師丈一尺四寸余 寺傳弘法大師作
- 一 本尊 釋迦如來坐像 師丈二尺八寸余 寺傳行基菩薩作
- 一 釋迦如來坐像 藤原二尺二分余 寺傳行基菩薩作
- 一 阿難尊者立像 幅高三尺一寸余 寺傳昆首羯麻作
- 一 迦葉尊者立像 幅高三尺一寸余 寺傳昆首羯麻作

寶物

- 一 龜居山記 桐箱入一卷

右は寛文の頃常寺の住職以空大僧正。鎮元天皇へ拜謁の際。天皇より拜受せし所の宸翰にして。書中殿島神社に関する秘事等記載あり。院主の外堅く見ることゝを禁ぜり

- 一 瀟湘八景野立屏風 八枚折壹雙 高三尺四寸六分 幅一尺八寸七分

右は常寺の住職尊海上人。大藏經を得んか爲に。大内義隆の紹介により。渡韓の際。請ひ得て携へ歸りたるものなりといふ

- 一 豊公陣中枕屏風 貳枚折 三十六歌仙 光信筆
- 一 梵鐘 鐵製 徑八寸五厘 高九尺二寸八分 銘に允曉庵小鐘とあり。豊公征韓の役分捕せし所なりといふ
- 一 酒壺 吸筒一名 全 上

以上三品は豊臣秀吉公の寄附にかゝるものなり

- 一 兩界曼荼羅 貳幅 興教大師覺鏤上人筆

- 一 大釜 鐵製 徑三尺七寸 深二尺七寸

此大釜は往昔南町に設けたる大風呂に用ひたるものにて。殿島神社に奉仕せる。社家供僧の潔齋を爲す用に供したるものなりといふ。これに附隨せる横石堅石あり。横石は平清盛の寄附にかゝり。堅石は毛利元就の寄附にかゝれり

以上の外同寺に安置せられたる阿彌陀如來坐像。弘法大師の像(大師)如意輪觀音坐像(行基)二王像(作者)等。又凡作にあらざるあり

住吉神社。同寺の傍にあり。祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命の三座にして。これ元龜二年吉田兼右郷の勸請せられたる所なりと

いふ

右風呂。大元神社に行く道の傍にあり。石を築きて造りなせる蒸風呂にして。古昔御山にて求聞持修行の僧徒風濕の氣に惱めるものを

癒へしめんが爲に弘法大師の築かせ玉ひしものなりといふ

木比屋谷公園。大元公園の東隣にあり。園内には拱木枝を錯へて

天碧を陰翳し。閑靜なる一佳境なり

大元公園

市街の西端を距ること三町餘の處にあり。東西の兩側は蕪鬱たる岡巒に接し。北は渺茫たる滄海を隔て、遠山を銜み。又近く有の浦より米ヶ浦に到るの沿岸翠岱と相對せり。南は平遠幽邃にして溪谷深く展開し。遙に雲中に聳ゆる繪馬ヶ岳の絶壁を仰ぐべし。この絶壁より滴るところの清水木の根岩が根を潜りくゞりて大元神社の背面に出で。白雲洞の前を抄めて海にそゞぐ。之を大元川と爲す。其水極めて清冽。

涼々として奇岩碧樹の間を流れ。潏然として溪流となり。泓然として池の如く。危橋亭榭この間を縫ふて趣を添へ。以て四季の遊客を迎ふ。これを旅館白雲洞と爲す。大元の櫻花は嚴島八景の一にして古人の吟詠に現はれたるもの尠なからず。石風呂の前より木比屋谷の平曠をよぎり。大元神社の神地内外百樹春色を迎へて黄鳥縦に嬌音を競ひ。花香雲影遠近相應じて大元湖中に蘸するの景は一入の美観にして。他に匹儔を見ざる所なりとす。加ふるに此地塵喧の外に卓絶して最も閑靜を極め。氣清く地靈に。緩遊の間自ら仙雲にあるの思ひならこむ

社下、白櫻交影深。濃雲淡靄共森々

北村篤所

三春、花時無多日。坐愛千金一刻陰

祠在仙山蒼波濱。白櫻相映滿階春

從二位 韶光

雲蒸霞散常彷彿。一段風流仰此神

宗 碩

いとまなき日ばかり花はさきにけり

風 朗
風 律

大元神社

大元神社。數百年を経たる樅樹杉樹の喬々として天に參はる樹林中に森然として聳ゆるものを大元神社とす。殿島神社の攝社にして其創建本社と同時代ならんといふ。祭神は國常立尊、大山祇神にして。相殿には佐伯鞍職を祀れり。當社の境内は一千五百九十八坪を

有し。周圍は即ち大元公園なり

境内に時雨の櫻あり。社前の山を橋山と稱し。この邊一帶を稱して

麓の森といふ。杜鵑を聴くの勝地たり。在原業平の歌に曰く。五月

雨にたちなば山のほとゝぎすふもとの森によなくぞなく。と以て

其由來するところ久しきを察すべきなり

大元公園より

水比屋谷公園まで一町。納々山(清盛山)まで二町半
多寶塔まで三町四十間。大聖院遺跡まで七町
瀧の宮神社まで八町半。白糸の瀧まで九町
公園道を通り紅葉谷公園まで十町

又同園より奥

富士岩まで七町半強。繪馬岩麓まで十七町弱
岩屋大師まで十七町弱。御劍岩まで十九町強
駒ヶ林まで二十二町半強。御山二王門まで二十二町強
御山本堂まで二十四町強

經納山

一に清盛山と稱す。字大西町の西側にある小岳にして。大

元公園に往復する山道の支線に當れり。此地は往昔平清盛土中を堀

りて經卷を納め。且つ許多の小石に法華經の首題を書して埋めたる

古跡にして。現存せる北端の石塔は清盛塚と稱し。清盛の靈を祀れ

るなり。又塔の背部にある石燈籠一基は。平氏の臣難波六郎より奉

納せる所なりといふ

消盡當年威焰々。寶塔三尺萎苔青

清 處

寂々千古無人中。空使松聲演法經

近年此丘の最も高きところに一の私設休憩所を構へ。茶を煮て遊客を迎ふ。之を見はらしと稱す。頗る山海の眺賜に富み。眞に見はら

しの名に背かす

くるゝともいかでかへらむ島山の

禪 高

なかめにあかぬはるの海面

多寶塔

一に二重塔と稱す。多寶の岡にあり。建物方二間半。高さ相輪頂まで四十二尺四寸五分。大永三年六月多寶院開山歡公知藏禪師の創建にかゝるといふ。本尊は元樂師如來の像を安置せしが。維新の後これを他に移して清正公の靈を祀り寶山神社と稱す。本塔は明治三十四年八月を以て。内務省より特別保護建造物に編入せられたり

本塔建物の古雅にして優秀なる。全國又稀に見るごころ。大永時代の建物としてほ雅きの感あり(大永三年は今を去ること三百八十一年なり)

此地は弘治元年九月毛利氏陶氏と合戦の時陶氏が陣營を設けたる一部の地に於てこの山背を登ること七町にして出城の舊跡に達することを得べ

出城

出城は弘治の昔。陶氏が駒ケ林の天險と連絡して。砦壘を設

けたる舊跡にして。多寶の岡より駒ケ林に達する中間の要衝に當れり。此地市街及附近公園の全景を脚下に俯瞰し。又海を隔て、遙に近村の諸山を望み。眺望愛すべし。是より山背に添ふて登ること十餘町にして。駒ケ林の舊跡に達す(駒ケ林の件は御山)

大聖院遺跡

御山の麓瀧の宮公園に接したる高原にあり。瀧山水精寺大聖院と稱し。眞言宗とす。世々嚴島神社の別當職に任し。全島第一の巨刹と門閥とを以て有名なり。世に座主と稱し西の御室と稱するもの是なり

當院の開基は其年曆頗る古きも。數度の回縁によりて其所傳を詳にする能はず。然れども大同元年弘法大師御山開基前後に於て。本院の創設せられたることは明かなり。降て治承四年高倉帝行幸記に。當時の住職尊教を以て。座主阿闍利に爲じ玉ふ云々あり。又中興の開山は日輪上人にして。法器の聞へ高き學匠なりしといふ。天正中仁助法親王止住あらせ玉ひしより。仁和寺院家の任を世々にし。西の御室と稱するに至りしなり。仁助法親王の薨去は天正十二年十一月二十九日にして。其御廟所は御遺言により。對岸の大野村

字赤崎に葬り奉りしが。今の宮島驛西端に存するもの是なり。明治十八年七月。今上天皇陛下當町へ行幸あらせらる、や。當院を以て行在所に遊ばされたり。當院は境内一千七百二十坪餘を有し。四邊鬱然。頗る絶塵の淨境なりしにも拘はらず。明治二十年十二月不幸にして祝融の災にかゝり。本島唯一の巨刹は一朝にして灰塵となり。歴代の重寶古書等盡く烏有に歸し。千古の名刹。今はたゞ其礎石の落落たるを認むるのみ。明治三十四年一月。故小松宮殿下當町に御來島遊ばせらる、や。親しく本院の遺跡に臨ませられ。御歎惜之餘。現住職明尾僧都に對し。左の御令旨をたまはりたり。

御令旨寫

宮島大聖院ハ古來西の御室ト稱シ。勅願ノ道場ニシテ。仁和寺門跡ト深キ由緒ヲ有セリ。故ニ歴代皇族ノ移住アラセラル、モ多ク。又屢々行在所ニ充テラル、等。帝國著名ノ靈刹ナルコトハ今更旨ヲ待タズ。然ルニ一朝回祿ノ災ニ罹リ。附來幾多ノ歲月ヲ經ルモ。再興未ダ其緒ニ就カズ。空シク趾跡ヲ存スルノミナルハ。斯ル勝地ノ一大缺典トシテ衆庶ノ最モ遺憾トスル所ナリ。今回殿下親シク該院へ臨マセラレ。御歎惜ノ餘。貴納へ舊觀復興ヲ御至囑

遊ハサレタリ。貴納宜シク恩命ノ辱キヲ拜戴シ。盡碎自ラ任シ。速カニ復興ノ實ヲ舉ゲ。以テ優渥ナル御令旨ニ奉答アラントナ。殿下ノ命ヲ稟テ特ニ申進候

明治三十四年一月十六日

小松宮家令 丹羽 龍之助

明 尾 快 雄 殿

豊臣秀吉公當島へ參詣の際。當院に於て和歌の御會あり。之に倍席せるもの義近以下三十五人。三十六詠あり。今其數首を録す

きゝしよりなかめにあかぬ嚴島

關白秀吉

みせばやと思ふ雲の上人

ことの葉もをよばぬ春の海山を

義近朝臣

君がながめどなしておくらん

行舟もきみがみゆきのをりを得て

長盛

波もしづけき春の宮島

春ごどのころしもたらぬ山櫻

三成

よもきかしまのこゝちこそすれ

名も高き宮居はるかに来て見れば

太 一 坊

かすみのするのおきつ白浪

瀧の宮公園

瀧の宮公園は御山の麓にあり。園内頗る喬木に富み。松杉檜樅榎等の老幹古木參差技を交へて空を蓋ひ。御山の前半面より直下せる清流はこの間を貫流して景を添へ。頗る幽邃の趣を極む。園内に大聖院遺跡、大師堂、瀧の宮神社、火消不動堂、白糸の瀧布等あり

白糸の瀧は瀧宮神社の背面にあり。其瀧の漲り落つるさま。千條の白糸を亂せるが如きを以て此稱あり。こゝに會したるの清盤。瀧菴喬樹の間に散点せる奇岩怪礁に觸れて曲折流下し。御手洗川に會して止む

瀧宮神社。嚴島神社の末社にして。湍津姫命を祀れり。夏の夜に當

り。この宮の附近を流る、溪水に添ふて。深緑叢中に映する無数の螢火は。一種の奇觀にして。古人の八景に數へたる所なりとす

瀧の宮の水螢 (嚴島八景の一)

藤原總長

森々綠樹遶宮邊。南岳懸雲吐立泉

僧 獨 麟

萬點水螢三伏夕。涼風亂影似秋天

右中辨光榮

湖陰古廟倚葱籠。自是幽人避暑宮

權大僧都惠通

晚映水簾螢火影。輕和濺沫逐微風

瀧見岩。平面なる拾坪餘りの大盤石にして。瀧の宮神社の前石段道の傍にあり。これ治承四年三月高倉天皇當島へ行幸の際。此岩上に

於て白糸の瀧を徹覽ありしより其名起れりといふ。其時曼珠院法親王の詠じ玉ひし和歌あり。曰く。やまたかみ登ればのぼる春の日にくりかへし見る白糸の瀧

紅葉溪公園

殿島神社の半面を環流せる御手洗川を遡り。南町の南端山勢の頓挫してうち開けたる處。御山山顛の一面より流下せる清流。南溪の幽谷を貫きて來たり泓然として一區の清澄を作り。楓樹松樹櫻樹の老幹參差幹を交へて此清流を蓋ひ。奇岩怪石は溪の兩脚に出没して苔鮮色濃かに。涼亭拾餘區川の中外に峙ちて瀟灑畫けるが如く。溪邊殊に楓樹に富み。江邊低く柯をたれて澄水に影をやどし。玉露紅をそめて愁ふる楓葉の秋に至りては。千紫萬紅。點々深き緑の間を綴りて一種錦繡の境をつくり。頗る清婉なる風趣を呈せり。若それ炎威燠くが如き三伏の候にあたり。遠く南溪の幽谷より湖底の清流を

透ふて絶へ間なく吹き來たれる涼氣は。又當園の特色にしてまことに塵襟を拂ふに足れり。かゝる境内に位置を占めて顧客を迎ふるもの。これを旅館岩惣と爲す

此是蜻州三勝一。神明護得幾千秋

谷 干城

滿溪紅葉畫圖裡。一道鳴泉繞屋流。丹楓蔭冷水奔流。臨水家々起小樓。想得絃歌人散後。數聲鳴鹿滿山秋

木原桑宅

紅葉谷公園より西の方

大聖院遺跡まで六町。瀧の宮まで七町半
白糸の瀧まで九町。多寶塔まで六町半
經納山(清盛山)まで八町半弱。大元公園まで十町
谷ヶ原公園まで一町半。鳥居松公園まで四町半
瀧の尾公園まで七町半。梅林及金石地蔵まで九町半
長濱公園まで十二町

同 園より東の方

光明院。字大町の岡天狗山の麓にあり。淨土宗智恩院末にして。本

尊は阿彌陀如來の立像（恵心僧都の作）とす。當院は土地高燥にし
て清潔。座上より山海の景色を望み得べし

當院の開基は以八上人（慶長時代）にして頗る英才あり。二世辨西能く其志を
繼ぎて堂宇を開擴し。十四世素信（元文時代）十五世怒信（寛延時代）共に徳望あ
り。中興の祖と稱せらる。十八世學信（寛政時代）又法器の開へ高く。爾後現住職
荒谷隆徳に至るまで。二十六世法燈連綿たり而して現時有する所の檀徒の如
戸數三百二十戸に及べり。當院に於ける國寶及寶物の主要なるもの左の如
し

國寶

- 一 阿彌陀如來立像 金泥塗切金模様にして甚だ優美なり。御丈一尺六寸五分。作者未詳なれどもなかの傑作なり
- 一 來迎彌陀如來 御丈二尺七寸。精地金泥彩色の畫幅にして。頗る古色を帯びたり。恵心僧都の眞筆なり

寶物の主要なるもの

- 一 觀音像 巨勢金岡筆
- 一 不動明王像 弘法大師作
- 一 白河法皇御震翰
- 一 善道大師像 雪舟筆
- 一 毘沙門天立像 智證大師作
- 一 地藏尊像 弘法大師作

一二位尼時子像。作者未詳

谷ヶ原公園。紅葉谷公園の東隣にあり。谷ヶ原の麋鹿は古八景の

一なれども。今や昔の面影を改めたり。同園平原の景は見るに足ら
ずと雖も。山上の經營其當を得ば又一大勝地たるを失はず。當園は
面積一萬八千二十坪を有せり

なく鹿のこゑは秋なるやつか原
をかべの松はときはなからに
風早實積

雨餘、豊草滿原、春。水綠沙明境自眞
麋鹿知無羅網患。呦々不敢遊遊人
寺田臨川

鳥居松公園。園の中央に當り。數百年の歲月を経たる二株の松樹

並び立ちて。鳥居の如き形を爲せるか故に鳥居松の稱は起れるなり。
本園は字中の町の背部に位せる岡槽にして。眺望の勝に富めり。此
邊櫻樹多く。陽春三四月の交に當りては。市中の老若男女。此園に

來りて觀花の宴を張り。陶然として爵を散するの整妙なからず

かたるともゑやはつくさんなかくくに

この島山のはるのけしきを

うちかすむこのしま山のさくら花
長 吉

なかめにあかぬはるの海面

稱名庵。淨土宗の庵寺にして。鳥居松公園の麓にあり

瀧の尾公園。鳥居松公園の東方に位し。櫻花を以て顯はる。園内に

不動明王堂及細布の瀧あり。當園より鳥居松公園を経て。谷ヶ原

公園に通ずる新設道路あり

當園より〔西鳥居松まで三町。谷ヶ原まで五町。紅葉谷まで七町半
東梅林及金石地藏まで二町。長濱まで四町半〕

寶壽院。本尊阿彌陀如來

眞言宗京都仁和寺派にして。其創立は天慶年中にありといふ。降つ

て文安の頃。高野の學侶宥順上人天奏を経て。堂宇を再建せしを以て

中興の祖と爲す。宥順より十九世を経て。以て現住職上見法龍に至れ
るなり

寶物の主要なるもの

一 樂師如來畫像。明の嘉靖四十四年。聖烈仁明帝畫工に命じて畫かしめ玉へ

一 歡喜天皇肖像。未詳者。一 不動明王畫像。弘法大師筆

一 三尊彌阿陀。慈心僧 都筆。一 五大尊畫像。唐人筆

一 不動明王尊像。妙澤筆。一 愛染明王尊畫像。未詳者

金石地藏。上川德壽庵と稱し。禪宗の庵寺なり。本尊は金石地藏尊

にして。佛體半石質半鐵質にして。甚新なる有名の佛像あり

梅林。維新の後荒廢せしが。近時梅樹の植附ありて。やゝ面目を改

めたり

長濱公園

長濱は市街の北端なる棧橋より三町餘の處にあり。海を隔て、西の

方大元公園と斜に相對し。其洲濱三町三十間餘に涉り。全園の反別拾町一反貳畝歩に達せり

一條の白沙新月の形を劃し。入江を挟みて長く延び涉り。背後には蒼鬱たる青山を控へ。前面には渺茫たる蒼海を隔て、大野地御前等の諸山に對し。洲濱には拾餘株の老松假塞して背後の赤松林と相對し。翠色江の内外に映じて一段の風趣を添へ。眺望壯闊。頗る山水の勝に富みたり

海水浴場はかゝる秀麗の地位を占めて洲鼻に建設せられたり。このところ海水極めて清澄。潮流の陳謝よく其度に適し。静養頗る驗あり。夏時避暑をかね。茲に入浴せる輩尠なからず

右浴場は毎年舊曆六月中旬より。八月中旬まで數十日間開設するの例なるが。一人前金四錢にて終日入浴することを得るの例とせり

長濱神社。同濱にあり。嚴島神社の攝社にして。興津彦命、興津姫

命を祭り。相殿に所翁を祀れり

要害山公園

要害山公園は市街の東北端に横たはれる一の岡巒にして。西及北の両面は海を隔て、沿海の諸山に對し。南は東部の市街を下瞰し。また高く御山の翠色を仰ぐべし。岡上には拾餘種の老松矯々として凌霄摩雲の狀勢を呈し。頗る眺騁に富みたり

今の要害山一圓は天文弘治の昔毛利元就が陶晴賢(全姜)を討滅せんとするに當り。敵を死地に陥れ。一時に勝敗を決せんとの躊躇より特にこの島に渡り。此處に於て最初に些壘を築きたる宮尾城の舊跡にして。天文二十四年五月下旬工を起して經晝夜を重ね。翌年即ち弘治元年の夏に至りて功を竣へ。之に已斐豐後守同五郎兵衛及新里掃部介を部將として精兵三百騎を附し。守備を嚴にして敵を誘致せしめたる城墟たりしなり。要害の稱は此時より起れりといふ

此岡に
今伊勢神社あり。天照皇大神、八幡大神、素盞鳴尊、興津彦命、興津姫命、春日大神を合祀し。相殿に大織冠鎌足公の靈を祀れり
存光寺。禪宗の寺院にして。要害山の麓宇伊勢町にあり

第三編 御山

御山の開基

御山は本島中央の高山にして海面を抜くこと一千五百八十四尺餘。
山上には求聞持堂を始めとして大小數十區の堂宇各處に散在し。翁
鬱たる樹林は是等の堂宇と共に巨岩絶壁の間を点綴して趣を添へ。
山態頗る秀麗なり。これ今を去ること一千九十八年前大同元年丙戌

の年十月。弘法大師唐より歸朝の際この山に登り。その山勢の秀麗
非凡にして祥藹の氣漠々としてたち上るを見。錫を茲に留めて梵閣
を經營せしところの靈場にして。護摩の香煙今になほ薫じて千古靈
蹤の面影を存し。信者遊客の登山せるもの四季絶ゆる間なく。實に
千古に顯絶せし靈跡ありとす

古人さしなみ草を著はし御山の佳景を寫す。語簡にして要を得たり。
今左に其一節を抄録す

あけはて、御山にのぼらんとて瀧の宮へたちより。白糸の瀧をな
がめ。こなたかまたへゆきめぐり。靈佛靈社を拜するにいくとこ
ろといふ數をしらず。危樓たかくそびゑて雲をおび。飛閣前はれ
て海にのぞめり。蘿をよちては巖窟にいり。松が根をどりて湖底
にぐだる。石泉したり落ちて青苔道なめらかなり。猿は子をよ
んで木の實をあさり。鹿は人になれて寺門にいる。登りつくして

絶頂に座せば。忽ちこゝろ登仙するが如し。蒲岡のくまぐま遠のくしまで眼下にうかびて。張の小舟も松のこづゑにゆきかよへり。さて本堂虚空藏にまうで、佛舍利三光石をぞ拜したてまつり。求聞持の行者に齋を供養し。御供物を頂戴し。奥の院弘法大師の前にぬかづき。それより舟にかへり侍りぬ

一の鳥居。字瀧町を距ること一町ばかりの處にあり。是より本堂まで登路十八町あり

懺悔地藏。經塔。大師堂。火消不動堂。これ皆一の鳥居より御幸橋に到るまでの間にあり

祈不動堂遺跡。豊臣秀吉公の護身佛なりといひ傳ふる不動尊を安んじたる處にして。公朝鮮征伐凱旋のち此處に納めたるなりと。

されども現今荒廢して其影をさぐめず
御幸橋。一枚の大石を以て架したる石橋にして。高倉天皇白糸の瀧

微覽ありし際架設したる所なりといふ

瀧宮神社。白糸の瀧。瀧見岩。一の宮公園の附近にあり

五丁目。御山の半腹に當り頗る眺望に富めり。市街及周圍の公園を眼下に望み。又海を隔て、遙に木郡沿海の諸山及安藝安佐兩郡の遠山を眺め得べし

中堂。登路七丁目にあり。元休所の設けありしも現今年荒廢せり

岩屋薬師。九丁目窟の下にあり

幕岩。十丁目十一丁目前面の山腹にありて其形幕を張れるが如し。岩面は苔蘚菌滑かにして點々斑文を染め出せるが如く。其窮極するところの面積幾何なるを知らず。或は曰く此巖拾餘町の山谷に連るれりと

十一丁目より十五丁目二王門に到る四町許の間は全く石道にして。道の左右附近一帯殊に樹木喬くたちこもり。頗る幽邃の趣を極む

二玉門。門の両側に金剛力士二軀を安置せり。元この處に二の鳥居建設せられたりしも現今替廢せり。是より上部を御山の本山と稱し名勝舊跡各所に散在せり
 是より御山神社を經本堂より宮廻りを一周すれば五町餘の道程あり又此處より南方(三玉門の下)降り道は奥の院に達する道路にして。五町餘あり
 又此處より西方は駒ヶ林及護摩谷に達するの道路にして。駒ヶ林は登り三町にして達し得べく。護摩谷岩屋大師までは六町にして達することを得べし

御山神社

御山神社は市杵島姫命(中央) 田心姫命(左側) 瀧津姫命(右側)の三柱女神を齋祀れる所にして。大盤石の上に安置せられ岩上の周圍瑞垣二十間を超へたり

このどころ前は數百尋の絶壁にして深溪其底を没し。社前にたゝすみて谷底を下瞰すれば。覺へず心膽を寒からしむるものあれども。前面に鬱葱たる青山を望み。南方に淼漫たる海洋を望み。頗る心胸をして爽然ならしむるものあるなり

登御山

雖愛雲光薄 尙知嵐氣遮 穿林觀瀑水
 度嶺遇藤蘿 松假堪爲棧 巖懸自作家 賴 春水
 樵童華表外 拍手喚神鴉

同賞月

非隨仙侶來 安觀仙山月 直自海心升 同 春水
 又於波面沒

御山神鴉の由來

此山上に雌雄一雙の靈鳥あり。御山神鴉と稱す。推古帝の朝佐伯鞍

職既に宜下を蒙り。嚴島大神の御鎮座所を定めんとて鳥の浦々を巡
檢するに當り。(因茲にあり)船發父崎沖合を過ぎる頃。桑を海上に浮
べて其地點を下するに當り。一雙の靈鳥御山より飛び降り。桑を捕
みて御山に運び去りたるを始めとし。爾後一千三百十餘年世々相傳
して今日に至れるあり。(後父崎鳥喰すべし)此靈鳥は凡鴉より少し小
くして美麗なり。常に御山に捷息して凡鴉の畏敬する所となり。其
氣格極めて高尚なり

御山神鴉 (嚴島八景の一)

この山の宮居をさらでいくとせか

すめる鳥のつがひはなれぬ

中納言輝光

僧 日 峯

嵯峨靈嶽瑞煙霏。遙見黑衣下翠微。
蘋藻巧啣斜日外。翩々時掠客船歸。

求聞持堂

一に本堂と稱す。本尊は虚空藏にして其他諸佛像を安置せり。本堂
は大同元年十月弘法大師當山開基の際。求聞持滿座の靈跡にして。
開持の火今に絶へざること正に一千九十餘年。而して修法の行者信
徒の輩年に月に踵を絶たず。實に千古の靈場たり

本堂は大師の創立後平清盛公の營繕に次ぎ。降て長享元年將軍義尙公の
再繕あり。其後慶長八年國主福島正則公の修繕ありしが。明治二十一年
一月回祿し。全二十七年に至り町民義財を融して現堂宇を建立したるな
り

堂の前面に錫杖梅と稱ふる古木あり。大師登山の時携へたる錫杖を
立て置き玉ひしに。生ひつきたりと云ひ傳ふるもの是なり。又本堂
の後に閑伽水と稱ふる清泉あり。大師修法の時加持明星水として
用ひ玉ひしところにして。水質頗る清冷にして甘美なり。又本堂の
左側に曼陀羅石と稱ふるあり。數丈の盤石にして石面に梵字及び三
世諸佛天照大神宮正八幡三千七百餘座等の文字を鐫刻せり。大師自

ら刻し玉ひし所ありといふ

三鬼神社。追張鬼神、魔羅鬼神、時眉鬼神の三神を祭れり。社壇は

近年の修繕にして本堂の上にあり

鐘撞堂。堂内に梵鐘を懸く。これ治承元年右大将平宗盛公の寄附に

かゝれり

昆沙門堂。本尊昆沙門天（建物三間五尺
五寸四面なり）

毎年陰曆正月六日の夜は其結願に當れるを以て。信者の諸方より參

詣するもの抄なからず。現今なほ夜中提燈を携へて本山に登り。以

て此堂に參拜するもの多きは古例を襲へるなり

石洞門。大岩石蓋ひかゝりて自ら門の如き形を成せり

岩屋不動。岩石自ら屋根の如き形を爲し。その内に不動尊を安置せ

此邊一帶の風景

鐘撞堂及昆沙門堂附近は老樹蒼鬱としてたちこもり。岩石皆千歳の
苔を封じて古色を帯び。地盤に境静にして頗る雅趣を呈し。殊に昆
沙門堂より頂上石に達するの間は大岩石巖々として天成の化工を極
め。一步一觀生面を開かざるはなし

御山頂上

頂上は宮廻の中央に當り豁然として一境をみせり。伊豫周防の諸山
は雲煙の間に縹渺とし。佐伯安藝兩郡の諸島は白銀盤上に黛を凝ら
し。漁舟白帆の点々この間に來往せるさまは水禽の波に漂ふかと疑
はる。又先峰山は翠巒として南方に横たはり。繪馬ヶ岳は突兀とし
て西方にそびへ。四邊の風物競ふて秀色を捧呈し。宛然たる名手の
一大輦畫を展觀するが如し

この頂上の南端に峙てる巨岩を頂上石と稱す

龍燈杉。數百年を経たる杉樹ありしが。今や朽腐して僅かに其根幹

を存するのみ。昔御山に登りて昆沙門堂に參籠せる信者この杉樹の
 元に到り。遙に腰細浦沖合に浮み出でたる龍燈を拜するの慣例あり
 しに依りて此名ありといふ。龍燈は通例舊曆正月元日より三日まで
 の間。又は全月六日の夜大宮沖合または腰細浦沖邊の海上に現する
 あり。夜漸くふけて山の影も見え難くなり。腰細の浦の真砂にうち
 寄する波の聲まさに睡らんとするや。最初一燈浮み出づると見るに
 二燈となり三燈となり。須臾にして六七燈となり。三十となり。五
 十となり。無數の幻火水上に浮走するかと思ふうち又混じて一燈と
 あり。而して明滅定りなく。風波強きときは火光動搖して見定めが
 たく。火色普通の燈火に類し多くは曉に到りて消滅すといへり。然
 れども年に依りて現出せざること多く。其現否の年豫め期し難し
 といふ

龍燈のこゝ夫の聖崎の蓬萊と共に嚴島海上に於ける二幻象に屬せり。こ

れ素より物理的現象の表出たるに相違なきも。其眞理は未だ闡明せられ
 ざるなり。特に抄記して學者研鑽の資に供す

満干岩。丈餘の岩石にして側面の中央に穴あり。海水の満干につれ

て潮水或は留り或は流出すといふ

船岩。其形恰も船の如き大盤石にして。岩下に地蔵尊を安置せり

大日堂。本尊大日如來〔建物四間四寸四方なり〕

弘法大師御山開基同時の建立にして。往古神護寺と稱したるもの是

なり。これ大師修法の道場として建立せるところにかゝるといふ

目洗薬師。大日堂の傍にあり。眼を病めるもの本尊に賽するもの數

なからず

三界萬靈水掛地藏。此處岩石の間より清冽なる泉水湧出せり

水晶石。丈餘の大石にして中央の穴より窺へば石中水晶を以て充た

されたりといふ

奥の院

御山と先峠山との中間谷底に當り。自ら別區域を爲せり。茲には大師堂、(及籠所)彌勒堂、水手向地藏尊等安置せられたり。此邊最も喬木に富み老樹鬱々として晝も暮も暗く。所謂深山幽谷の境にして自ら天地の人間に非らざるを覺へしむ。先峠山の半腹には帆掛岩鏡岩屏風岩等の名石あり。又奥の院より谷底の溪流に添ふて海岸端踏瀉に通ずる道路あり。二拾餘町にして達するを得べし

御山二王門より以西に於ける名勝舊跡

鹿屋谷。二王門より二町五十間餘の程にあり。路上に平面なる大岩石横たはり。山高み溪深くして頗る閑静を極め。眺望殊に佳なり。藤原興風詠じて曰く。あらし吹く鹿屋の谷のたに深く月影清し雲のくれなみ

三劔岩。往古三段に折れし劔を納めたる所にして。岩下に觀音の小

祠あり

岩屋大師

岩屋大師は一名龍ヶ窟と稱し。又護摩谷の窟と稱す。巨巖天を蓋ひ四面皆岩壁にして自ら石室を作し。僅に門口を有するのみ。而して窟の内疊拾數疊を敷きうべく又直立して歩行するに足れり。窟の奥に祀れるは弘法大師の靈にして。是實に同大師護摩修法の舊跡なりといふ(是より大元公園に通ずる道路あり。下り路此邊附近一帶の地は巨岩落々として山骨を組織し。古松雜樹森々として其間を點綴し。岩上の蒼苔露深くして錦の如き斑紋を点し。徑路曲折升降頗る急なり。仰で觀れば削れるが如き千尋の絶壁突如として頭上に落下し來らんとし。俯して眺むれば深谷遠く渡りて雲煙の鎖させるを見。四邊の風物轉た幽凄なるを覺ゆ

繪馬岩。岩屋大師の東面に聳ゆる絶壁中にあり。然れども近づいて

之を認むるを得ず。富士岩附近よりこれを遠望する時は。絶壁の中
央に當り駿馬後方を顧みつゝ千尋の谷底に向ふて降下する黒色の印
影を留め。頗る奇觀を爲せり

龍ヶ洞。岩屋大師石室を距る數十間の下大岩石のもとにある岩穴に
して。其深さ測るべからず。古昔龍の脱け出でしといひ傳ふるもの

是なり (一)是より大元公園に達する途中八町餘

駒ヶ林

(一)此地岩上に馬蹄の跡あるを以て一に龍ヶ馬
駒ヶ林は御山と相對して聳ゆる繪馬ヶ岳の絶頂にして。海面より高

駒ヶ林は御山と相對して聳ゆる繪馬ヶ岳の絶頂にして。海面より高
きこと方に一千五百三十四尺餘。西方に面する部分最も峻峻を極め。
數百尺の絶壁一面の巨巖にして。恰も刀もて削り立てたるか如く。
有名なる繪馬ヶ岩の奇觀は此裡に点綴せらるゝあり。而して此山頂に
達するに兩道あり。一は鹿屋谷附近よりし一は二重塔の方面よりす。
山頂に近づくに隨ひ昇路漸く急に岩石次第に多く左折右往して登る

なり。然れども歩一步其風觀を新たにし。自ら心神の清爽を覺へし
む。頂上には巨鯨の如き二個の大磐石両面に分れて横たわり。百數
十人を座せしむるに足れり。この邊一帶の地喬樹に乏しと雖も。風
趣ある松樹檜樹の類岩間岩間の間を文ごりて景を添へ。自ら一種の
佳境を作成せり。眸を凝らして遠近山海の眺曠を縦にせば周圍の絶
勝歴々指顧の間にあり。仰で大虚を望めば浩々乎として羽化登仙す
るが如く。自ら胸宇を濶大にし覺へず洪遠の氣象を誘發せしむ

此地誠に稀有の一大異境たるにも拘はらず。暗黒の裡に埋没せられたり
しは頗る怪むべきなり

此ところは弘治元年九月毛利元就陶晴賢を討滅せしとき。陶氏の部
將弘中參河守隆包及中務の父子が市街の各地に轉戦して其大勢の去
れるを見るに及び。百餘騎の部下を率ひて此險を扼し。以て毛利氏
の大軍に當り。三晝夜の血戦を爲して花々敷最後を遂けたる古戦

にして。今を去ること三百四十九年前のことなりとす
蓋し隆包父子のこゝ名分上より論する時は青史上の罪人たるに相違なき
も。晴賢の部下落々たる二萬有餘の軍中にありて克く其終始を全ふし。
戦國武士の先驅として其本分を盡したるの一段は陰徳太平記の詳悉せる
所にして。今この絶壁の形勢と参照して考ふる時は。自ら懐徳の情に堪
へ得ざらしむるものあるなり

朝日觀音堂
夕日觀音堂

駒ケ林より數町の處にあり

朝日觀音堂より一町餘の下にあり

右兩堂共に駒ケ林より山背に添ふて降るなり。降路急なれども山海
の眺望に富み。沿道の風色又一種の生面を開けり

登御山率記所見古詩三十韻

石川丈山

嚴島蒼浪上。御山素雲邊。廟貌壓垠堦。霞圍溢穹天。
伊昔蓬瀛地。縹渺樓神仙。應真飛錫弄。安期賣藥還。
谿訝坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗憩樹蔭。相視盥飛泉。

旁磚無人境。登臨意惘然。芝草醉玄解。松子飽僊僊。
巨石競怪狀。遠客愕屯蹇。浮景接崑閩。層陰延虞淵。
回顧踞磴磴。跼步凌絕巔。俛仰忘身世。鳴懷獨躡蹻。
翹魅時出沒。蝙蝠晝飄翩。歸墟千仞谷。弱水萬里船。
對西青壑篔。亘東翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。
雙飛巢壽域。幾度見桑田。日靈尊如在。市杵姬所躡。
二聖三千載。小祠八九椽。空海据神區。遺求聞持傳。
蒲牢吼枸箴。華表峙術阡。猿叫煙霧裡。鹿臥殿堂前。
木客姑獲鳥。化鬼又變焉。居僧譽被害。群民懼爲虔。
嗟非有道骨。疇能久稽旃。多病訪負局。修生問稚川。
高蹈嘯巖曲。薄言避塵緣。早洗許由耳。將拍洪涯肩。
茲游重難繼。卑懷聊欲宣。讀者可嫺咲。信筆記一篇。

第四編

七 浦

島廻に關する事

島廻 嚴島の周回七里三十二町餘。この周圍浦々の中に於て。約一里づゝを隔てたる海岸樞要の地に於て七ヶ所の神社あり。この神社を以て俗に七胡子と稱し。又この神社を齋祀りたる七ヶ所の浦を以て七浦とは稱ふるなり。島廻とは此七浦(七浦とは神社を鎮め祀りたる主要なる浦所を稱するまでにして實際周圍全体の浦の數を東より順次漕ぎ廻りて。各浦の神社に參拜するの謂にして。其起因は推古帝の朝(十餘年前) 嚴島神社御鎮座同時に始りたる事ありとす)

島廻の順序及儀式。島廻を爲さんには前日先づ身體を潔齋し。當日未明三笠濱より船を舩して出發するなり。先づ神官の船には四手

を懸けたる柳を立て。兩舷に幕を張り。之に祭主として神官一人樂人二人使丁一人水主數人與に乗組むなり。次に願主參拜者一同數名の船歌師(船歌師とは七浦沖合の船歌を唱ふる船中にて)と共に別船の裝飾せるものに乗組み。外に仕度船(儀式に關する仕度飲食調理の具を準備せるもの)。合せて三艘舩相銜みて漕ぎ出し。大鳥居沖より嚴島神社を遙拜しつゝ、東方より進航を始むるなり。進みて杉の浦に着すれば拜殿に於て奏樂祝文あり。終りて朝飯の饗あり。退出の際拜殿の前に茅の輪を立てたるをくゞりて祓を爲す。(以下各浦に於ける儀式の次)これより順次に各神社の參拜を了へ。御床浦にて茅の輪を納め。網の浦にて上陸し。大元神社に參拜の後酒宴の饗あり。終りて後嚴島神社に報賽の神樂を奉り。以て其式を終了するなり

浦廻及浦遊。浦廻とは以上の如き慣行上の儀式を用ひずして。希望者が随意に浦々に船を漕ぎ寄せ。適宜各神社に參拜するものをい

ひ。浦遊とは拜神上の意味を有せず。又必ずしも全島を周廻するまでもなく。望むところの浦々勝地に船を寄せて遊覧するものをいふ

紹巴

良政

玄仍

露川

龜のうへの山かゝすめるおきつ舟
るみに雁なく月のあけぼの

硝子のくにやわか葉のいつくしま

長濱より聖崎に到る沿岸。この沿海に小なきり浦、大なきり

浦、清水ヶ浦、米ヶ浦、屏風ヶ浦等の浦々あり。山低く水碧にして

海波常に風光を醜し。風光頗る清麗あり

聖崎

聖崎は棧橋より拾餘町の程にあり。全島の最北端にして。この邊一帶山勢最も低く。屏風ヶ浦牛ヶ濱蓬萊岩等の勝地相共に接近して特殊の奇勝を賦す。前には廣島灣浩渺として一大磨鏡を開き。後には

御山繪馬ヶ岳の諸峯翠巒として天潢に朝するあり。岸邊の蟠松低く梢をたれて清艶なる水波に映するの邊。二個の蓬萊岩雙々相擁して突兀海中に聳へ。瀧酒頗る風韻を極めたり

寺田臨川

今古精禪無廢馳。閻宮時進紫霞外

蓬萊の出現。嚴島圖會に曰く。「この沖合蓬萊と稱するものあり。

三四月の頃風恬かに波穩かある時。此處より浮き出づ。その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし。其上松柏生茂り。或は宮殿樓閣の象ありて其壯嚴たぐへん物なし。光明海上に彩きわたりて次第に消滅す。今も往々これを見る人あり」云々

聖崎近海に於ける蓬萊の出現に就ては。西遊記輪池叢書等の古書にも見へ。又漁父古老の口碑にも傳稱せらるゝ所。蓋し稀に見るまことの物理的現象に外ならざるべし

海連嚴島勝區多。蜃氣浮來映曉霞

小竹老人

樓閣遙傳天樂響。方知天女弄琵琶。

杉の浦。は聖崎より海上四五町の程にあり。陸上よりすれば棧橋より十五六町にして達することを得べし。洲濱二町四十間餘。平原と海面との間に横たはり。松樹叢生して北海の渺茫に臨み。遙に佐伯安藝沿海の諸山と相對し。眺望快濶。怡も水彩畫中の景に髣髴たり杉の浦神社。同浦の西端にあり。島廻第一の參拜所にして。底津少童の命を祀れり

いく世をか杉の浦風吹く音も

神さびにけるこの宮居かゝる

中納言持豐

金剛水。同浦東端の海邊より入ること二町餘。小丘の麓にあり。其水清冽混々湧出して晝夜を分たず。傳へいふ當郡廿日市洞雲寺の金剛和尚此處に座禪せしとき始めて湧出せるものにして。同寺の金剛水と其水脈相通せりと

包ヶ浦。此浦は毛利元就陶晴賢の陣を襲ひたるとき。草津より船を

此處に寄せて上陸せられたる地点に當れりといふ

包ヶ浦神社。同浦の東端なる巖の上に建設せられたり。祭神は

塩土翁にして七浦七社の外なり。塩土翁は神武天皇西偏より起りて

天下を平定し玉ひし時帷幕に參じて功勞抄るからざりし人なり。元

就この浦より上陸して遂に勝を奏するや。社壇を改め社領若干を寄

附せられたりといふ

七浦風煙隨棹移。神鴉飛處羽差沓

寺田臨川

快巖奇石麗如畫。畫裏秋光盡上詩

鷹の巢神社。島廻第二の拜所にして底筒男命を祭れり

腰細浦神社。島廻第三の拜所にして中津少童命を祭れり是より海

面漸く開き遠景又一入の觀あり

沙みては浪もいはほをこし細の

中納言持豐

浦吹く風やはげしかるらん

大砂利浦。御山本堂の眞浦に當り。平原廣くして濱開け優に一部落を爲すに足れり。又一佳境と爲す。是より樅の木浦、藤ヶ浦、鯉崎、青海苔浦、養父崎、山白浦等の各地を經。革籠崎まで殆んど二里半に渉るの間沿海一帶特に磯岩に富み。海面廣く東南に開きて陽氣を帯び。松樹雜木の類磯際まで生ひ茂りて梢を波にひたし。風景概して壯麗なり

青海苔浦

青海苔浦は棧橋より海上三里半弱の程にあり。中央に清流あり。平地あり。又入江あり。青海苔神社あり。地南海に面するを以て。氣候溫和。眺望快澗にして又一勝區たるを失はず
青海苔浦神社。同濱の中央にあり。島廻第四の參拜所にして中筒男命を祀れり。島廻の船この浦に着するや。祭事の後拜殿に於て午

飯を饗し。配膳に於て青海苔を用ふること古例なりとす

高安ヶ原。青海苔川の溪流に添ふて廻ること十三町許にして。高安ヶ原と稱する地あり。弘治の昔陶晴賢戦ひ利を失ふや。親臣數人と此處に遁れ來り。主從環座。慨歌劔舞して最後の名残を留めて自盡したるの舊跡たり。左に辭世の歌を録せん
何をしみなにをうらみんもとよりも

陶晴賢

莫論勝敗跡。人我暫時情。一物不生地。

柿並佐渡守房精

ありときなきしと思ふも迷ひなり

山崎勘解由隆方

おもひきや千年をかけし山松の

伊香賀民部大輔隆正

朽ぬるときを君に見んとは

此時供奉の士外四人同じく自盡す。後元就時賢の首を實際し。廿日市の洞雲寺に葬りて石塔を建て。慇懃に供養せられたりといふ

養父崎

養父崎神社。祭神靈鳥にして七浦七社の外とす。島廻の船此沖合に達すれば神官奏を海上に浮べ。鳥向樂を奏すれば一雙の靈鳥御山の方面より飛び降り。交互波に浮べる奏を啄へて御山に運ぶ。此時船中より拍手して禮拜す。是を鳥喰式とは稱するなり。もし船中に於て穢れある時は靈鳥の出向なしといふ(養父崎山の半腹に石の小屋爲して家屋の如き形を)

山靈高古碧崔嵬の 千歳祐民最異哉

僧 獨麟

設供舟中吹玉笛。一雙、玄羽出雲來

一琴、螺髻渺茫中。老樹周遭天女宮

伊藤東涯

又有神鵜能報吉。舟行長ト去來風

この邊一帶浦も亦く洲もなく。磯岩快石森々たる山脚を没して海中に散点せるところ。一小古祠を安鎮し。頗る雅趣あるのみならず。前は海面遠く開けて遠近の諸島を望み。風光甚明媚あり

七浦の島めぐりする舟のうちの

中納言持豊

もゝの音あかす神やきくらん

似 雲

いつまでもみるめはかれしいつくしま

山白濱。此地七浦の中央に當り。濱邊のかゝり頗る青海苔浦に類し。湖濱三町餘。川流あり入江あり神社ありて又一佳境たり

山白濱神社。同濱にあり。島廻第五の拜所にして表津少童命を祭れり。

かしこしな名さへ動かぬ山しろの 濱邊にしめし神の宮居は

中納言持豊

革籠崎。本島南端の一岬角にして。御床山脈のはしりて南海に窮す
るところ絶壁たゝみて海中に入り。頗る奇觀を爲せり。岡上に有名
なる早咲の櫻あり。是より桃の木浦棟の木浦下り松浦長の浦等の浦
浦を越へて須屋浦に到るの間三十餘町。山海の風光頓に一段の趣を
改む。白帆弛るく風を采みてこの間をよぎる。身は山水畫幅中の人
たるを覺へざるあり

須屋浦

須屋浦は殿島西端の一角に當れる地にして。三角形を劃したる一條
の洲嘴蒼々たる海中に斗出せるところ。青松一面に叢生し。天光松
影倒まに海に落ちて空中に一道の翠虹を現す。當園の松原は面積四
千六百七十坪を有し。其洲濱の延長五町十七間餘に達せり
此浦に名水あり。干潮の際磯ぎはより湧出す。其水甚だ清冷。漁人
これを汲んで須屋の清水と稱す

須屋浦神社

同園に接し境内八十七坪を有せり。島廻第六の拜所
にして表筒男命を祀れり。島廻の際此神社の拜殿に於て餠餅の饗あ
ること古例なりとす

浦はるゝすやの朝なぎ夕なぎに
みる眼はさこそたぐひなからめ

中納言持豊

仰見層山幾萬松。波間澄映蘸高峯

小西 皆雲

御床浦。山光水色相掩映して一區の佳境を作成せり
御床浦神社。島廻第七の拜所にして市杵島姫命を祭れり。この地

は大古市杵島姫命が最初御降臨まします時眞床にして。社前に
大盤石あり。岩面龜裂して自ら龜甲の如き紋章をませり。殿島神社
の御紋章に龜甲を用ふるは茲に起因せりと云ふ

中納言持豊

御床のいはほ動きまきかけ

内侍岩。治承の昔徳大寺大納言實定卿殿島へ参詣(中納言の時)の時。内侍の中に有子と稱ふるものあり。年紀十六七。希代の琵琶の名手たるの故を以て實定卿に愛せられけるが。實定卿の歸京に際し。この處の岩上に來たりて別れを悲歡せしに依り。内侍岩の稱は起れりといふ

輔踏瀉。洲濱二町半。平原廣くして溪深く入り。溪流一道御山の奥の院より來たる。此溪流に添ふて奥の院に達する道路あり。川は平原の西端に添ふて流れ川口に石橋を架す。殊にこの邊一體は頗る喬樹に富み。枝幹交錯して林を爲せるもの幾千株なるを知らず。此地は治承の昔平宗盛御山寄附の梵鐘を鑄造せし所なりといふ。是より江の浦に到るまで數町の間沿岸相連りて屏風の如く。蟠松低く稍をたれて一種の清錦を畫き。加ふるに鬼石、大黒石、飛石及槐

石等の名石ありて趣を添へ。海波蒼然風光滴らんとするばかりなり網の浦。大元浦の隣に當り公園地に屬せり。海面遠く開けて眺望に富み。園内に淺黄櫻相生松等の名木あり

七浦に於ける風景上の概観

全島の中央御山山脈の四面に分岐して環海に窮する處。無數の小支脈となり。此小支脈末端の海に接するところ或は屏風の如き絶壁となり。或は落々たる磯礁快岩となり。而して其小支脈各末端の相對峙せるの中間に幾多の平地川流入江を作り。又其平地の海面に接する所に於て松原となり。洲濱となり。洲濱斷續。灣涇屈曲。斷岸出入。磯岩凹凸錯雜して種々の變態を演出せるところ。古松雜樹。森森鬱々として到る處に生ひ茂り。此間を貫流せる幾多の清流は絶へず海に朝して海藻の髪を梳り。以て億兆の鱗屬を育せしむ。加ふるに周圍遠近の蒼溟に纏繞星羅せる無數の諸山島嶼は御山群峯の落々

翠色と相映帯して景を添へ。七浦の風煙海に連りて雅趣あり。延長
 七里三拾餘町八拾有餘の各浦。一浦一觀の妙味を有するのみならず。
 岸邊の一樹一石も自ら天真の風趣を存し。千姿萬狀殆んど端倪すべ
 からざるなり。若し夫れ朝暉夕陽海面を彩り。或は月光金波を漲ら
 し。金龍躍り。銀鱗の蹙するを視。或は満目白皚々たる蓬萊全島の
 大觀を極めんか。其絶美絶景。豈よく筆舌の及ぶ所ならんや。蓋し
 嚴島全島海岸四圍の風光は御山各地の諸景と調和して二大絶勝を作
 爲せるもの。而して吾人は世の識者が。其真個の價値を認識せし
 のあるや否やを發見するに苦しむものなり

嗚呼世の都ての勤勞者よ。自然はかくも吾人に慰安の仙巖をめぐみ賜へ
 り。試に一兩日の行を緩ふして斯世界無比の樂園に歩を枉げ。以て活
 の休養をはかるも人生の要務にあらすせんや。蓋しボートにまれヨッ
 トにまれ又和船にまれ。將來に於ける本島の四周は。方に楫を採つて起
 つて自由に勝遊を試むべき好適地にあらすや

みつしほはたゞ大海のいづみかな
 宗 祇
 遊 行
 松 梅 院
 昌 叱
 重 瀬
 松の雪うみも彩色やいつくしま
 石川 丈山
 江山頗係念。行樂賞春晴。俯看魚龍躍。
 仰聞猿鶴鳴。月昇燈影淡。風靜磬聲清。
 要永別雲水。留詩記姓名。
 舟路無風晴晚嵐。奇觀須向此間探
 神姫早已垂靈跡。古史何曾載妄談
 積水遠連天下山。層巒高峙地東南
 未輕着句君休怪。海内名區指屈三
 川 田 剛

雜 錄

嚴島港。全島の要津にして東部市街の海岸に當れり。港の東西に二個の波止場あり。この兩波止場の兩側に於て更に二個の大雁木(西雁木は神あり。皆與に船舶の繫留に便なり。棧橋は東大雁木の東方に位し。其東隣に小浦あり。又船舶の繫留所たり。當港は純然たる港灣の形を爲さざるも。内海にして波穏かゝるを以て優に數百艘の船を泊し。又拾餘艘の汽船を碇泊せしむるに足れり

宮島渡航株式會社。棧橋の上り口字小浦にあり

憲兵休憩所。棧橋附近字濱の町にあり

郵便電信局。棧橋より二町餘。海岸通三町目にあり。明治三十五年一月より同十二月まで一ケ年間に於ける當局電報及郵便取扱件數左の如し

一電 報(發信數)四千八百三十四件

一郵 便(發信數)十八萬三千六百五十三通

一小包郵便(引受數)二千六百三十三個

八田貯蓄銀行支店。郵便電信局の隣にあり

嚴島高等小學校。字中の町にあり。明治三十五年十二月末現在に於ける教員及生徒數左の如し(當校には嚴島の特産)

一教員數(校長一人。訓導四人。計六人)

一生徒數
 在籍者(高等科)二百七十八人
 出席者(高等科)二百七十五人

嚴島警察分署。海岸通一町目西波止場の口にあり

國有林保護官舎。字大町光明院の下にあり

嚴島町役場。字大町にあり

演劇場。字北の町にあり。明神座と稱す

勸工場。字久保町にあり
航路標識。龜石燈竿と稱す。 輔踏潟沖にあり

嚴島の物産

當町の物産は所謂木竹細工にして。 轆轤物杓子類竹細工彫刻物等を
主とす。 而して轆轤細工には茶盆、菓子器、筆立、會席盆、煙草盆、
燭臺、菓子鉢、茶入、茶壺、茶卓、煙草入、行厨入、楊枝立、
針指、恭入、盛物臺、時計臺、寫真掛、体操器械、杯、コップ、パ
イプ及小兒玩具等あり。 又匙類には圓形、卵形、茄子形、貝形、
葉形及西洋匙等ありて大小一ならず。 竹細工には花瓶、菓子入、熨
斗盆、竹箸、及柄杓等の如きあり。 其他楊枝類、齒朶籠細工、肥松
細工、箕入等枚舉に遑あらざるなり
又食用品としては鱈、アサリ、ミル貝、魚類、薯蕷、岩茸、蕨、蕈
類、雪花漬、惣太郎漬、宮島饅頭、裏櫻餅等の如きありて賞味すべ

。其他盆栽植物としては石蘭、片葉蘭、鳶蘭、孔雀蘭、岩千鳥蘭
等ありて愛玩するに足れり

町民職業別の大要

〔三十五年
九月調〕

竹木細工百九十人 ○ 轆轤師百人 ○ 杓子削 匙類を 六十人
産物店五十四戸 ○ 旅人宿四十二戸 ○ 大工職六十五人
渡船業者三十八人 ○ 飲食店三十戸 ○ 案内者二十人
穀物商十八戸 ○ 彫刻職十八人 ○ 樵夫十七人
藝妓 (藝妓は月々増減一ならず三十五年度に於て) 其他略之
は二十五名以上四十名以下の間を上下せり)

宿屋組合規約に依りて定めたる旅籠料及飯賄料

旅籠料 (二泊二飯)

- 一等 (甲) 金壹圓五拾錢 (乙) 金壹圓 (丙) 金七拾錢
 - 二等 (甲) 金五拾八錢 (乙) 金四拾八錢 (丙) 金參拾八錢 (丁) 金參拾四錢
- 飯賄料 (一食)

一等 (甲) 金五拾錢 (乙) 金四拾錢 (丙) 金參拾錢
 二等 (甲) 金貳拾五錢 (乙) 金貳拾錢 (丙) 金拾五錢 (丁) 金拾參錢
 產物店の組合規約
 產物店に於ても組合規約の設けあり。殊に其賣品價額の如き一切正
 札を附し。其直段に依りて物品を販賣するの定めなれば。購入者に
 於ては便利なりとす。

11/2/38
 嚴島案内記 終

明治三十六年五月五日印刷

明治三十六年五月十日發行

廣島縣佐伯郡嚴島町五百七十五番邸

著 者 兒 玉 周 平

發 行 者 第五回内國 瀬業博覽會 嚴島準備會

廣島縣佐伯郡嚴島町二百七十三番邸

右 代 表 者 山 本 信 太 郎

廣島縣廣島市細工町八番邸

印 刷 者 高 坂 德 市

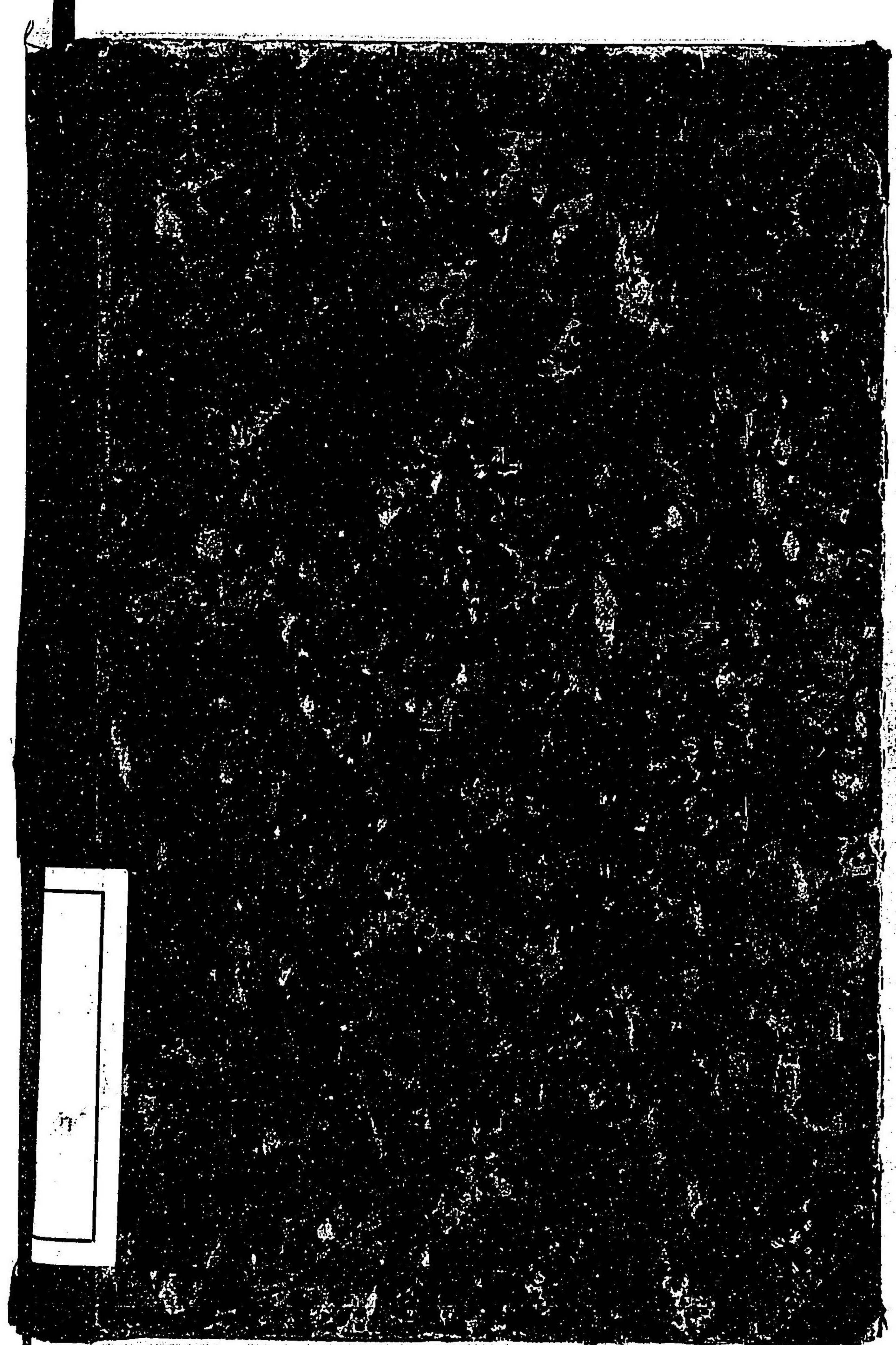
廣島縣廣島市細工町九番邸

印 刷 所 高 坂 印 刷 部



99
/

94
1



025752-000-7

97-1

巖島案内記

児玉 周平/著

M36

ADC-3288

